

翻案シエイクスピア恋模様四篇

『シンベリン』『恋の骨折り損』『十二夜』『から騒ぎ』

作／村野玲子

## 登場人物

『シン・レリン』 pp. 3-18 — [2014 年執筆]

ポステュマス

イモージェン

クロートン

ピザーニオ

王妃

『恋の骨折り損』 pp. 19-39 — [2013 年執筆]

男 1 / 女 4

男 2 / 女 3

男 3 / 女 2

男 4 / 女 1

マスター

通りすがりの女

『十一夜』 pp. 40-55 — [2016 年執筆]

マルヴオーリオ

トービー

フェステ

マライア

オリヴィア

『から騒ぎ』 pp. 56-72 — [2015 年執筆]

俳優 1

警部 / 俳優 2

夜番 1

夜番 2

夜番 3

# 『シンベリン』

0

ポステュマス登場。

ポステュマス どうも。初めまして、僕、ポステュマスと言います。嫁はイモージェンといって、何と僕の生まれたブリテン王国のお姫さまです。僕たちは幼なじみとして一緒に育ったんですね。で、年頃になって思いが通じちゃったと。しょうがないですよ、好きなものは好きなんですから。

二人で結婚式を挙げましたよ。腕輪の交換なんかしちゃった。幸せだったな。

ところが、それを知ったお父上様、シンベリンという王様なんです、この人が怒っちゃってね。身分違いの結婚は絶対に許さんと、大反対されちゃったんです。おっかなかった。でもうちの奥さんも負けてなくてすね、私がこの人を選んだのはお父さまが遊び相手にあてがったからすわ、なんて啖呵切っちゃったりして。なんだとこら、やるかこら、とまるで広島ヤクザみたいな大ゲンカ。

困ったな、どうすっかな、これ下手したら死刑かな、なんて考え込んでるうちに、僕だけ追放されることになっちゃいました。えへ。寂しいな。やるせないですね。

で、僕の飛ばされた先はイタリアはローマ、愛と欲望と芸術の都。遠かった。でもここがね、すごいんだ。いろんな誘惑がある。綺麗、おいしい、美しい、素晴らしい。もう毎日感動。刺激的。一生ここに居たら飽きないだろうなと思います。でも違う。僕の都はここじゃない。イモージェン、ああ、イモージェン。君こそが僕の都、僕の国。僕は君という国家の、たった一人の国民だ。そして君は僕の国民。イエス、この愛に変わりはない。互いに交わしたこの腕輪こそがその証。大丈夫、また会える日がきつと来る。

そう信じて、日々暮らしているところです。ただ一つ、心配があります。クロートンという男が、彼女につきまとっているんです。王様がついこないだ再婚したんですけど、その王妃の連れ子です。なので今は王子という身分

なんです、こいつがね、僕が言うのもなんですが、本当にどうしようもない奴でして。まあ彼女がなびくことはないと思いますが、僕の信頼する部下ピザーニオもそばにいないことだし。でもね、何とも憂鬱の種はあるんです。大丈夫かな。心配だな。いや、でもな……。

ポステュマス、行く。

1

クロートン、イモージェン、ピザーニオ。

クロートン おはよう、イモ子。

イモージェン ……

クロートン 手を貸して、イモ子。おはようのチュウだ。

イモージェン ……

クロートン イモ子。

イモージェン イモージェン。私の名前はイモージェン。その変な呼び方やめてください。

クロートン なんで？ 妹だからイモ子で、イモージェンだからイモ子。

ダブルミーニングだよ、お洒落だよ。

イモージェン お洒落が聞いて呆れてブルーインパルスでキャット空中三回転だわ。

クロートン 何？ キャット？

イモージェン ああもういい。お願いだからどっか行って。ねえピザーニオ、何とかして。

クロートン あ、言い忘れてた、おはよう、ピザオ。

ピザーニオ ピザーニオです。

クロートン ちぢめてピザオ。いいあだ名だろ？

ピザーニオ はあ。

クロートン はあじゃねえよ。

ピザーニオ は。

クロートン ありがとうございますだろ。言ってみろ。

ピザーニオ ありがとうございます。

クロートン 頭が高い。

ピザーニオ (頭を下げ) ありがとうございます。

クロートン あはは、ねえほら、見た見たイモ子？ 下げたよ、頭。大人の  
大人がさ。イモ子も呼びなよ、呼んでいいよ、今日からこい  
つをピザオって。

イモージェン 呼ばないし。

クロートン ねえ、遊ぼうよ。お医者さんごっこしようよ。

イモージェン しない。

クロートン イタリアに行ったバカとは散々遊んでたんだろ、いろんな遊  
びをさ。

イモージェン ええ、そうね。詩を読んだり、歌を歌ったり、花の名前を  
調べたり。私と夫は文化的かつ、清くスピリチュアルな関係  
でして。

クロートン ええ、何それ、つまんない。イモ子は本当の楽しさを知らない  
んだよ。世は広いのに、かわいそう。大丈夫、僕がおしえ  
てあげる。新しい扉を開こう。大人の遊びをしよう。甘いお  
菓子は卒業だ、赤い血がしたたるステーキの世界へ。

イモージェン (本を読みだす)

クロートン あつ、本を読むの？ えらいね、日課の読書だね。読書には  
BGMがつきものだ。僕とピザオで歌ってあげるね。ピザオ、  
並んで。せえの、

クロートン 朝だ 朝だ 起きてるね

イモ子はえらい 本を読む

なんでも知ってる賢いイモ子

僕のお嫁さんにぴったりだ

ピザーニオ (クロートンにやや遅れながら小声で歌う)

イモージェン うるさい。あんたわかってんの、私人妻よ？

クロートン 認められない結婚だろ？

イモージェン お父様は認めなくても神様は認めてくれます。この腕輪  
がその証。

クロートン でもあいつはローマだろ。

イモージェン 離れていても心は一つ。私たち、愛し合ってますから。

クロートン そうかなあ。行ったのっていつごろだっけ。先月だっけ。も  
うイタリア女に目移りしてる頃じゃない？

イモージェン あんたと違うの。

クロートン イタリアは娼婦が多いらしいからな。それとこれとは別腹だ  
って、今頃むさぼりついてるんじゃない？

イモージェン (本を音読し) Yの無遠慮には、何となく私の眉をひそめ  
さす、いやな誇張がありました。はじめのうち、私はYの行  
為に眉をひそめずにはいられない自分の心持ちを振り返って、

「これは、私の方が無理なのだろうか」と思ってみました。  
クロートン（かまわず）ローマはいい街だって聞いたぞ。豊かな食事、豊かな芸術。

イモージェン けれども、私はどうしてもYの行為を心から許す気にはなれませんでした。

クロートン そして豊かな夜のひととき。

イモージェン ……

クロートン 怒った。怒った。怒った。イモ子？

イモージェン お願い。生きてていいから、せめて私の視界から消えて。

クロートン ひどい、ひどいな、イモ子。僕はこんなにイモ子のことが好きなのに。お医者さんごっこしたいだけなのに。

ピザーニオ クロートン様、行きましょう。

クロートン なあ、おまえはどう思う？男としては、遠くのピザより、近くのうどんだろ。おなか減ったら食べちゃうだろ。

（笑い）おたわむれを。人それぞれにございます。

クロートン ご主人様思いだな。よし、気に入った、僕の手下にしてやろう。

ピザーニオ いえ、私は。

クロートン 何だよ、出世したくないの？ 美味しいもの食べたいでしょ、いい女抱きたいでしょ？ かなえてやるよ、おかーたまに言うて。

イモージェン 呪われた親子ね。脳の髄まで汚れた水が詰まってる。

クロートン おかーたまに失礼なこというな。

イモージェン たまだかザルだか知らないけど、その薄い脳みそ垂れ流さないように、さっさと部屋に戻りなさい。

クロートン なんだよ、イモ。おまえなんかイモだ。かわいくてもな、憎いときもあるんだぞ。いいもんね、おかーたまに言いつけてやる。おかーたまは偉いんだぞ、なんたってお妃様なんだからな。おまえなんか単なる姫だろ、おかーたまの方がずっとずうっと上だ。

イモージェン 行つて。お願い、ピザーニオ。

クロートン イモ子。

王妃、通りかかる。

王妃 あら、王子と姫と、おそろいね。

クロートン おかーたま。

王妃 仲良くしてちょうだいね、もうすぐ夫婦になるんだから。

イモージェン お断りします。

王妃

あなたの意志は関係ないの。この国の未来に関わることなんですから。クロートン、あなたはシンベリンの後を継いで、この国の王様になるんですよ。

クロートン うん。

イモージェン つかあ。

王妃

そしてイモ、いえイモージェン、あなたはその妻となる。大丈夫、悪いようにはしないから。

イモージェン

いや、いやいや、絶対にいや。私は守る、純潔を。あの人と再び会えるその日まで。誓いを込めたこの腕輪にかけて、私は信じて暮らします、二人の遠い、幸せな未来を。

幻想のポステュマス、現れる。

ポステュマス イモージェン。

イモージェン あなた。

2

イタリアで一人過ごすポステュマス。  
住まいへの帰路。

ポステュマス

どうも、ありがとうございました。また飲みましょう。チャオ。お氣をつけて。グラシアス。(手を振る) 楽しいな、イタリア。いい街だ。女の人もみんな綺麗。晴れ渡る空、くつきりした緑。ブリテンとは大違いだ。あそこは基本が曇りだからな。どうしたってこう、内に内にこもるよね。人間関係も泥つくし。

泥か。

イモージェン、元気かな。こないだまた手紙がきたけど、心配だな、大丈夫かな。会いたい会いたい会いたいーで一枚、ポステュマスポステュマスポステュマスーで一枚。宿題の漢字ドリルみたいになってる。

やばいよね、やられちゃってるよね。心配だな。僕だって会いたい、会いたいよ、イモージェン。

ポステュマス、帰って行く。  
戻ってくる。

やっぱおかしいよね、あの手紙。追い詰められてるとしか思えない。何かあったのかな。  
あつ、まさかクロートンに。  
何てことだ。

おい、馬、馬はどこだ。  
いた。

おい、その馬番、港まで借りるぞ。ブリテンに行くんだ。

ポステュマス、去る。  
戻ってくる。

いやいやいやいや、そんな憶測で動いちゃいけない。だって僕は追放の身。シンベリン王に見つかったら、それこそ死刑だ。元も子もない。慎重にいけ、慎重に。  
そうだ、それにもし何かあったらピザーニオが連絡してくるはず。

大丈夫、信じる。そうだ。

ポステュマス、帰って行く。  
戻ってくる。

イモージェン、あの馬鹿王子と結婚して、変わらず姫ライフを送った方が幸せなんじゃないかな。僕みたいな貧乏人と一緒になっても、楽しいことなんて一つもないんじゃないか？  
出世するとも思えないし。

いや違う、大丈夫、会いたい会いたい。ポステュマスなんだから。僕だって、会いたい会いたい。イモージェンなんだから。離れていても心は一つ。大丈夫。それにピザーニオだっているし。あいつは僕の部下だ、信頼できる部下、誠実な男……  
(帰りかけ、戻る)

でも、もしピザーニオが裏切ったら？ イモージェンは一人ぼっちだ。女一人、身を守る術もなく。そこへあの馬鹿王子が……彼女の寝室に忍び込み……  
きやあクロートン。

ピザーニオ、ピザーニオどこ？



へっへっへ、あいつは金で買収したよ。  
そんな。

観念しろ。清い体をウォールペイントしてやる。

いや、やめて、カラフルにしないで。

大人しくしろ。姫と王子で子供をつくるは、ブリテンの未来をつくると同義。これぞ王族のしかるべき営み。覚悟。  
きやあ。

ああ、でも仕方ない、私やっぱり姫だもの。自由など絵に描いた餅。

ごめんなさい、あなた。私クロートンと結婚するわ。さようなら。

腕輪、コトン。

許せーん。

馬だ、おい、馬を貸せ。代わりに王国をくれてやる、僕のじゃないけど。馬だ。貧乏人をバカにするな。

ポステュマス、去る。

### 3

クロートン、やってくる。

クロートン イーモ子。あーそーぼ。

ピザーニオ (現れ) おはようございます、クロートン様。

クロートン 起きてる？ 僕のお嫁さん。

ピザーニオ まあ、起きてはおられますが。

クロートン 支度中か。いいよ、待ってる。女はいろいろあるからな。

ピザーニオ お会いたくないと。

クロートン えっ、どうしたの？ おなかいたいなの？

ピザーニオ いえ、その、クロートン様に、お会いたくないと。

クロートン (かまわず) イモ子、大丈夫？ イモ子。お薬いる？ 持つてこようか？ あの日？ あの日？

ピザーニオ クロートン様、

イモージェン (現れ) だから会いたくないつつてんでしょ。

クロートン よかった、元気だ。おはよう、イモ子。BGMを歌いにきたよ。ほら、ピザオ、

イモージェン 結構です。

クロートン あれ、いいの？ そうか、やつぱり具合が悪いんだね。（手を出し）ほら、おなか出して。僕は気功ができるんだ。

イモージェン はつきり言わせてもらいます。私はあなたが嫌いなもの。

クロートン ん？

イモージェン あなたがいると具合が悪くなるの。だから二度と、私の視界に入らないで。私の前から消え失せて。同じ空気も吸いたくない、できることなら。

クロートン ん？

イモージェン でもこのブリテンにいる限り、あなたの気配はなくならない。今すぐにでもここを出て、あの人のところに行きたい。けど、今はお父さまの目もあるからそれも無理。だからじつと耐えてるの。このブリテンに耐えてるの。あの人とまた一緒にになれる、その時を思うことだけが私の希望、私の喜び。この腕輪こそがその証。

クロートン 大丈夫？

イモージェン だからあんたがいる限り大丈夫じゃないっての。

クロートン 頭、おかしいの？

イモージェン はあ？

クロートン 君、姫だよ。僕、王子。ブリテンの未来は、僕たちにかかっている。僕たちは一緒にいるしか道はないんだよ。

イモージェン いや。絶対にいや。

クロートン わがままだな、イモ子は。いい加減諦めなよ。ね、ピザオ。しょうがないよね。自分がどうしたいかなんて関係ないんだ、王族である以上。これは義務だよ。仕事だよ。

イモージェン 死んでやる。

クロートン 死ねないよ。君にそんな勇氣はない。それに、ピザオがそれを許さない。ね、ピザオ。

イモージェン そんなことない。ね、この人と一緒にさせられるくらいなら、殺してくれるわよね、ピザーニオ。

クロートン 守るよね、ピザオ。

イモージェン 殺すよね、ピザーニオ。

クロートン ピザオ。

イモージェン ピザーニオ。

クロートン ピザオ。

イモージェン ピザーニオ。

ピザーニオ ああ、ええ、その時になってみないと、何とも。いずれにせよ、私は姫様を大切に思っております。

クロートン ふうん、綺麗にまとめたな。

イモージェン 遠慮しないでいいからね。寝てる間に、パンとやってくれればいいから。苦しまないように。

ピザニオ は。

クロートン ねえイモ子、そんなにやなの？ 僕と結婚。

イモージェン 嫌ですね。

クロートン なんで？ 僕、大事にするよ。おかーたまだって優しいよ。

イモージェン あんたも嫌だし、あんたのそのおかーたまってのも嫌なの。お父さまに取り入って。下心スケケの下品な女。お父さまがおかしくなったのも、あの女との再婚のせいよ。

クロートン おかーたまを愚弄するな。

ピザニオ どうだろう。

イモージェン 愚弄じゃない、事実。お父さまがあの人をイタリアに追放したのも、あの女の入れ知恵でしょ。あんたと私を結婚させて、あんたを世継ぎにするために。乗らないわよ、そんな話。私を政治の道具にしないで。

クロートン してないよ。僕がイモ子を好きなんだ。ただそれだけ。おかーたまはちよつと不器用な僕を応援してくれてるんだ。

イモージェン だからわかって。私、人妻、私、人妻。

クロートン あんな貧乏人のどこがいいんだよ。

イモージェン ボロは着てても心は錦。私は彼の人間としての本質を愛するの。

クロートン 僕だってあるぞ、本質。

イモージェン あの人と真逆のかたちでね。中身スカスカ、着飾れ錦。せいぜいきらびやかに暮らしてちょうだい。中が透けないよう、厚着でね。

クロートン 失礼だぞ。

ピザニオ どうだろう。

イモージェン おかーたまに言えば？ あんたの強くて優しい、ヒルのように王座に吸い付いて離れない、生命力あふれる、たくましいおかーたまに。ついでに私もイタリアに追放してちょうだい。

クロートン おまえは僕と結婚するんだ。

イモージェン 嫌だって言ってるでしょ。あんたなんて、あの人以下の以下の以下の、イカ釣り漁船の夏祭りよ。そんなのと王座に座るくらいなら、こんな王国、燃えちゃばいい。

クロートン 言ったな。

イモージェン 何とでも言ってるわ。イカ、タコ、マグロ、サザエ、ア

クロートン ヨ、サケ、イワシ、ナマコ、ハタハタ。あんたなんか最低。  
わーん、

ピザーニオ ストップ。はい、ストップ、朝のスパーリング、ここまで。  
いや、今日も盛り上がりましたね。冷たいお飲物は？ いり  
ませんか？ いりませんね。はい、じゃあ解散。解散ですよ、  
解散。

クロートン 絶対後悔させてやるからな。

イモージェン 私は真実を述べたまで。

ピザーニオ はい、帰りますよ。お部屋に帰る。解散、解散。  
イモージェン ふん。

イモージェン、去る。

クロートン ねえピザオ、どうよ、今のどうよ。言い過ぎじゃね？ ちょ  
っとあんまりじゃね？

ピザーニオ まあまあまあ。

クロートン 超むかつく。超腹立つ。

ピザーニオ お察し申し上げます。

クロートン こっちだって超がんばってんだつつうの。毎日超早起きして  
え、歌とかいっぱい仕込んでえ、  
ピザーニオ 大変ですよ。

王妃、通りかかる。

王妃 あらクロちゃん、どうしたの？

クロートン おかーたま。

王妃 (ピザーニオに) どうも、お世話さま。偉いわね、今日もあ  
のイモ娘にご挨拶に来たの？

クロートン うん。

王妃 大丈夫？ ちゃんとお話できた？

クロートン あ、まあ、そうね、それなりに。ね。

ピザーニオ (曖昧な笑い)

王妃 そう。頑張るのよ。大事なのはコミュニケーションだからね。  
挨拶から始まって、天気の話、ささやかな出来事のお話。あ  
まり大きな事件事故の話は駄目よ、重くなるから。最近また  
涼しくなりましたね、ええ本当、あ、そういえば今年は小麦  
が例年より豊作らしいですよ。そうなんですか、それはよか  
った、パン屋がリスクを恐れず新作を出せそうですね、楽し

みだなあ、とこういくの。あくまでライトに、フレンジーにね。するとやがて相手も警戒心が溶けて、個人的なお話へうつる。私、実は寂しくて……。心を開くには段階が必要、特に女の場合はね。繊細に、柔らかくよ。いい？

クロートン

王妃

いい子。ピザオちゃんとも仲良くやるのよ。ではどうも、失礼します。

ピザニオ

(返礼)

クロートン

ばいばい、おかーたま。

王妃、行く。

クロートン

無理だよ。

ピザニオ

大変ですね。

クロートン

わかる？　ねえわかってくれる？　期待がさ、もう半端ないのよ。

ピザニオ

お察し申し上げます。

クロートン

やるしかないわけ、僕。わかる？

ピザニオ

はい、ええ、もう。

クロートン

イモ子のこの後の予定は？

ピザニオ

特にございませんよ。だいたい御本を読んでおられて、たまにうたた寝されるくらいで。

クロートン

何だよそれ、隠居の爺さんじゃん。若い娘が、かわいそうだな。

ピザニオ

それは同感にございます。

クロートン

僕さ、せめてイモ子と普通にお話できるレベルにはいきたいわけ。だからさ、ちよっとだけでも二人にしてくれない？　そうじゃないとほら、王子としてもさ、立つ瀬ないっていうのかっこつかないっていうの？

ピザニオ

ああ、まあ。

クロートン

(金を握らせる)

ピザニオ

いけません。

クロートン

(無理やり握らせ)　とつといて。今だけでも。あとで捨てていいから。

ピザニオ

(受け取る)

クロートン

ちよつとの間、散歩しにいつてくれるかな。

ピザニオ

かしこまりました。

クロートン

ああ、おい、ピザオ。

ピザーニオ 何です？  
クロートン おかーたまには（内緒）  
ピザーニオ （内緒）

ピザーニオ、行く。

クロートン バーカ。ほんと、人のいいやつ。お話できるレベル？ どんなレベルだよ。あの高慢な女が俺とまともに話すると思うか？ ここまできたら、もう無理だ。コミュニケーション以前の問題だ、言葉なんか通じない。だから最後の一手。体に教え込んでやる。あいつの純白の体を、ウォールペイントしてやる。俺の絵筆でカラフルに染め上げてやる。

クロートン、行く。

4

イモージェンの部屋。  
イモージェン、読書をしている。  
うたた寝をする。

王妃が現れる。  
小さな声で、イモージェンの耳元に囁きかける。

王妃 クロちゃんを好きになあれ、クロちゃんを好きになあれ。

イモージェンの腕輪を見る。  
王妃、腕輪をそつと抜き取る。

王妃 愛は形じゃないのよ。

何者かの気配。  
王妃、隠れる。

クロートン、現れる。  
クロートン、イモージェンに忍び寄り、見とれる。

クロートン かわいいな。

襲おうとする。

何者かの気配。

クロートン、隠れる。

ピザーニオ、現れる。

ピザーニオ イモージェン様、お風邪を召されますよ。

ピザーニオ、イモージェンの本を閉じてやる。  
何者かの気配。

ピザーニオ、隠れる。

ポステュマス、現れる。  
イモージェンを見つめる。

ポステュマス かわいいな。ん。

腕輪がないことに気づく。

ポステュマス くおつ。ぬおつ。

ポステュマス、身悶える。  
ポステュマス、剣を抜き、イモージェンを殺そうとする。

ポステュマス 裏切り者めが。  
ピザーニオ なりません。

ピザーニオ、現れ、ポステュマスを止める。

ポステュマス 裏切ったな。  
ピザーニオ めっそうもございません。  
ポステュマス ならばやれ。  
ピザーニオ 私が？  
ポステュマス そうだ。やれ。

ピザーニオ できません。  
ポステュマス やれ。  
ピザーニオ できません。  
ポステュマス やれ。  
ピザーニオ 無理です。

ポステュマス、剣をとる。  
ピザーニオ、それを奪う。  
奪った勢いで、剣先が隠れていたクロートンを刺して  
しまう。

クロートン うぐつ。  
ポステュマス・ピザーニオ えつ。  
クロートン (現れ) あああ、  
ピザーニオ クロートン様、  
イモージェン (目覚め) ん？  
クロートン 僕じゃないのに。

クロートン、倒れる。

イモージェン きゃあ、  
王妃 (駆け寄り) いや、クロちゃん、クロちゃん。  
イモージェン 何、なにになに？  
ポステュマス 僕じゃないから。  
ピザーニオ そりゃないよ。  
イモージェン あなた。  
王妃 クロちゃん、  
イモージェン やだ、何、どうしたの、  
ポステュマス 寄るな、雌豚、汚らわしい。  
イモージェン え、何？ どうしたの？  
ポステュマス 腕輪がない。その事実こそ、不義の証。  
王妃 クロちゃん。  
イモージェン え？ あれ、ほんとだ、ない。  
王妃 クロちゃん。  
ポステュマス クロートンと契ったな。  
イモージェン んなわけないじゃん。やだ、どこやったんだろ。  
ポステュマス 裏切り者め。  
イモージェン ピザーニオ、知らない？





ポステュマス あー、  
イモージェン ようこそおいでくださいました、追放先からわざわざ。  
王妃 あ、じゃあ、わかった、こうしましょ。あなたたちのことを  
王様にとりなして差し上げる。どう？

クロートン えー、  
王妃 クロちゃんにはもつと素敵な花嫁さん見つけてあげるから。  
クロートン うん。(イモージェンに) 残念に思うなよ。  
イモージェン (ポステュマスに) あんたさっきなんつった？  
ポステュマス 何が？

イモージェン さっき、私に向かって、裏切り者って言ったよね。あと何、  
雌豚？

ポステュマス いや、まあ、その。口癖？  
イモージェン へえ。どんなときに言うの？ 雌豚。朝起きて雌豚？ 食  
事して雌豚？ お茶飲んで雌豚？ おやすみで雌豚？

ピザーニオ 姫様、  
イモージェン 意味は、意味。あつ、とか、ちえつとか、そんな感じ？  
ポステュマス だって腕輪がなかったんだもん。  
王妃 だからほら、腕輪はここに。

イモージェン 腕輪してたらしいわけ？ 他の男とどうにかなってもいい  
わけ？ なんなのその形式主義。

王妃 腕輪、  
クロートン おかーたま、  
ポステュマス 心配だったんだよ。だって変な手紙よこすんだもん。  
イモージェン 変な手紙って何よ。私は思いのたけをつづったの。いわば  
叫び？

王妃 腕輪、  
ポステュマス 怖いって。  
クロートン おかーたま、  
イモージェン 怖いって何？私の思いが怖いわけ？  
ポステュマス ごめんなさい、

王妃 腕輪、  
クロートン おかーたま、  
イモージェン あなた、  
ポステュマス ごめんなさい、  
ピザーニオ (二人を制し) ご結婚、おめでとうございます。

## 『恋の骨折り損』

※枠で囲まれている部分は、実際の上演環境に合わせて変更すること。

1

男（マスター）　こんにちは。綾田将一でございます。猛暑の夏が去り、

だいぶ涼しくなりましたね。ようやく秋の姿がおぼろげに見えてきたところでございますが、みなさんいかがお過ごしでしょうか。僕はといえば、なんとですね、最近恋人ができました。ありがとうございます、ありがとうございます。どんな人かは秘密です。ちゃんと三次元ですよ。

でもこの恋というものの、特に付き合うまでは本当に厄介なもので「何考えてんだろ」「嫌われないかな」「迷惑じゃないかな」と相手の気持ちを探ってばかり。まっすぐ相手に尋ねればいいのに、それも無神経と思われそうで怖くてできない。

そして、そんなふう悩んでいる時に、隣に誰かがそっと居て「大丈夫」「がんばれ」とただ応援してくれるだけなんです。近しい仲間はそういうわけにはまいりません。何のかの口を出し、大きなお世話になったりもします。

本日はそんなお話でございます。原作ウィリアム・シェイクスピア『恋の骨折り損』お運びいただきありがとうございます。どうぞこゆっくりお楽しみください。（一礼）

あれ、お客様かな。いらつしやいませ。

男1　四人、いける？

マスター　ええ、好きな席へどうぞ。（奥へ声かけ）はい四名様、ご来店。（行く）

男四人、席に座る。居酒屋。

男1（王様）　いやいやいや。

男2（ビローン）　やっぱ、こういう店のが落ち着きますね。

男3　メニューはと。あ、貼つてあるのか。

男2　やつこと、煮込み、もろきゅうと、あと枝豆かな。

男4　あ、黒板、今日のおすすもありますよ。

男3　三崎港真イカのポン酢和えですって。

男2 ええ、イカは酢味噌だろ。

男1 おまえら、何楽しんでんの？

男2 え、注文決めるだけですけど。

男1 だめだめだめ、全然だめ。わかってる？ 惨敗なんだよ。

男3 ああ。

男4 まあ。

男2 そうですかね。

男1 おまえらそもそも非協力的すぎるよ。全員野球だって言っただろ。

男3 すみません。

男1 あれじゃ、俺が全ボジやつてるようなもんじゃん。投げて、打って、走ってさ。おかげでゴール前ガラ空きだったっつうの。

男2 それサッカー。

男3 あ、今日浦和の試合、予約忘れた。

男2 え、マジか。テレビつけてもらう？

男3 テレビあります？

男4 あ、そこ。

男3 ほんとだ。

男1 いいよ、いらない。

男2 ええ、／ 男3 すみません、大丈夫です。

男1 ビローン。おまえフオワードって、俺言ったよな。何でタマ持つてんのに走らねんだよ。バントばかりしやがって。

男2 何がです？

男1 さっきの話だよ。

男2 ああ。え、走りましたよ。超走りました、オフサイドギリギリまで攻めました。ましたけど、王様が勝手にゴール前から出てきたんじゃないですか。

男1 好きで出たんじゃないの。見てられなかったんだよ、おまえも、おまえも。

男3・4 すいません。

男2 ええ、

男1 反省しろよ。お前ら送りバントばっかじゃねえか。送る相手もないのにバント構えてどうすんだよ。そういうの日和見って言うんだよ。勝たせてもらうんじゃない、勝ちにいくんだ。プレイヤーの自覚あるんだろ？ 走れ、フィールド支配しろ。ボールとったらどんな回せ。連携こそがオールジャパンの強みだろ？ それが何だ、バントの構えで個人プレー。あっちうろろう、こっちうろろう。どこの部族の祭りだよ。おまえら全員内気すぎ。あの、牛若丸の、何だ。

男2 内弁慶ですね。

男1 それだよ、それ。おまえら全員弁慶だ。立ってそのまま往生しろ。

ああ、もう、どれくらい恥かいた。

男2 そうかなあ。

男1 何だよお前、さっきから。お前的には成功だったっていうわけ。

男2 いや、そりゃね、俺たちのにはうまくいかなかった感ありますけど、でも向こうからすればどうかなってところも、あるわけじゃないですか。聞いてみないとわからないですよ。

男1 聞けるか、ボケ。

男2 連絡してみますか。

男1 何、お前、アドレス交換したの。

男2 はい。

男1 え、いつ？ いついつ？

マスター現れ、

マスター あの、お通しなんですけど。

男1 はい。

マスター いりますか？

男1 いる、いるよ。適当に持ってきて。

マスター かしこまりました。あと、

男1 はい？

マスター (男2に) イカは酢味噌がいいですかね。

男2 まあ、俺は。

男1 好みだろ。

マスター そうですね。ありがとうございます。(奥に声かけ) はいお通し適当でお願い。(行く)

男2 いや確かにそう言ったけど。

男1 で、いつ、どこで。

男2 ああ、帰りですよ、クロークの前で。

男3 やってましたね。

男4 赤外線でピット。

男1 誰、誰、どの子。あ、待って、当てよう。せえの、で、

男1〜4 ロザライン。

男1 ええ、まじ。俺あの子絶対パス。おまえの太目好み、ランク上がってるな。

男2 王様だってあのガサガサした姫と仲良くやってたじゃないですか。  
男1 ガサガサ言うな、ガサガサ。いいじゃん、かわいいじゃん。それに

あの子、仕事できるんだぜ。俺ら幹事だからさ、めっちゃメールのやりとりするじゃん。それがさ、すげえ的確で、要領おさえててさ、もうとにかく仕事早い。いいね、気持ちいい。久々に惚れた。

男2 本当、仕事の鬼ですね。

男1 頭の良い女が好きなの。いいじゃん、めんどくさくなくて、話もできるとし、楽しいし。

男3 さすが先輩。

男4 ナヴァール商事営業部、期待の星。

男1 いやいやいや。で、おまえらは。

マスター現れ、

マスター あの、

男1 あん？

マスター 酔味噌が切れてまして。

男1 頼んでないだろ、イカポンもイカ酔味噌も。

マスター あ、そうか、失礼しました。（奥へ）ごめん、イカキャン、イカキャン。（行く）

男4 半端な省略。

男2 負けず嫌いだな。

男3 僕はあの、

男1 うん。

男3 トイ面の。

男2 ああ、あのゆるふわ系。

男1 ええ、俺はパスだな。たるい。

男2 人の好みなんだから。（男4に）お前は？

男1 あ、わかった、俺の横に座ってた子だろ。軍艦巻きみたいなの。

男2 あ、わかる、しかもネギトロじゃなくイカオクラ。な。

男3 いや、ちよつとわかんないです。

男4 いいじゃないですか、美人だし。

男1 まあ確かに美人だな。でも俺は姫だな。なんたって目力がいい。

男2 新人面接じゃないんですよ。

男1 バカ、お前、何でも一緒だよ。こういうのはファーストコンタクトで、どれほど相手のことを見抜けるかが非常に重要なんだ。

男2 たかが合コンでしょ。

男1 たかが？ お前たかがって言った？

マスター現れ、

マスター はい、お飲みもののご注文は。  
男2 あ、ごめんなさい、考えます。

マスター あれ、まだ？ ああ、ごめんなさい。（奥に）はいのんびり  
検討中。（行く）

男2 急ぐよ。

男1 お前さ、俺と姫がどんだけ苦労してセッティングしたと思ってんの？ お互い仕事で忙しいのによ、店探して、人集めて、連絡して、日程調整して。俺とあの子じゃなかったらこの話つぶれてたぞ。  
男2 でもそれで姫とやりとりできたんでしょ。楽しくやったんじゃないですか。

男1 お前、まじ、ふざけんな。おい、携帯貸せ。

男2 何で。

男1 いいから貸せ。貸せって。ロザラインの連絡先、消してやる。  
男2 嫌ですよ。

男1 貸せ。

マスター、現れる。

マスター ごめんなさい、お飲みものは。

男2 あ、すみません、ナマ四つ。

男1 俺はいい。瓶ビールください。

マスター グラスは。

男1 一つ。

マスター うわあ、社会性ゼロ。

男1 何？

マスター はい手間だけどお一人様だけ瓶。（行く）

男2 悪かったよ。

男1 ビローン。

男2 はい。

男1 ありがとうだろ、まずは。幹事おつかれさまだろ、あるいは。おまえがまず、そういう上から目線の偉そうな態度だから、引いちゃったんだろ、あの子たち。

男2 引いたのは王様のせいですよ。

男1 俺？ え、何、俺？

男2 王様の、王様ゲームのせいですよ。

男3 ああ。

男4 まあ。

男1 いや、待て。違う、違うぞ。そうじゃない。俺はおまえらがあまりにひどいから、捨て身で盛り上げようとして。

通りすがりの女 欲しい欲しいと欲しがる心、逃れ逃れていく縁(えにし)。追って逃れて先回り、いつの間にやら鉢合せ。愛し合わぬは奇跡の冒涇、叶えて見せよう恋心。

2

トイレ。

女四人が化粧直しをしている。

女1 (姫) ねえ。

女2 (ロザライン) ん？

女1 どうよ？ どんな感じ？

女2 うーん。イケるんじゃない。

女3 はい。

女4 いいっす。

女3 いい感じです。

女1 よしよし。

女2 店もいい感じだし。

女1 本当？ 私チョイス。このワイン、うちが扱ってるんだよ。

女2 出た、姫のワークトーク。良くないよ、ワークホリック。

女1 いいの。うるさいな、ロザラインは。今日はちゃんと遊ぶんだもん。

女2 あたし久々だわ、こういうの。

女1 いいでしょ、たまには。スイパラめぐりもいいけどさ。

女2 あ、今度表参道にもできるらしいよ。

女4 まじっすか？

女3 行きましょうよ。

女1 ああ、栗かぼちやのキッシュ食べたいな。

女3・4 食べたあい。

女2 サツマイモのグルグルロールケーキも素敵じゃない？

女3・4 素敵。

女1 秋って本当、太るよね。

女2・3・4 太る。

女2 あたしこないだ体重計乗ったらさ……ねえ姫、(チーク)塗り過ぎ



じゃない？

女1 そう？

女2 うん。ほぼバカボン。

女1 だって顔色悪いんだもん。

女2 何、疲れ？

女1 残業、残業、また残業。今週、ずっと午前様よ。

女3 げ。／ 女4 まじすか。

女1 今日久しぶりに定時に上がった。

女2 いい加減にしなよ。あんた死ぬよ。

女4 出来る女は大変っすね。

女1 違う。抱えてる案件が多いだけ。

女2 あんたらもそのうち、いろんな話に巻き込まれるよ。うちの部署、

女4 なんだかんだで人使い荒いから。

らしいっすね。

女2 組合もはや、御用組合。

女1 フランス運送総務課は人権無し。

女3・4 ブラックウ。

女1 だから狙おう寿退社。

女2 せえの、

女1・4 気合だ、気合だ、気合だ。

通りすがりの女、現れる。

通りすがりの女 もう、奥山さんたらまたやきもち。いいじゃない、小出さんと楽しくお話したって。ああ妬かれると信用されてないんだなって思っちゃう。もうちよつと辛抱強くなってもらわないと。でもやっぱり小出さん素敵よね。あのチーフ使いとかカフスとか、センス良くてギョングンきちやう。なのに奥山さんたら、冬場なんか長靴にチョッキでほとんどマタギ。ああ、マタギって、北国の熊撃ちね。でもマタギに惚れる女だっているの。

通りすがりの女、行く。

女3 ようし。

女4 頑張るっす。

女2 ねえ、何系だっけ、今日。

女1 営業系。四大出の、割とエリート。早稲田、慶応、ICU、一人青学。

女3 おお。  
 女4 なるほど。  
 女1 いいでしょ、ツブ揃ってるでしょ。ツブツブでしょ。  
 女2 でもエリートはマザコン多いからな。  
 女1 そうだけど。そこはまあ、育てるくらいの心意気で？  
 女2 育て系ね。手、かからないでくれるとありがたいんだけど。  
 女1 ね、ぶっちゃけ誰狙い？ かぶってもいいから。  
 女3 そうですね。  
 女2 私、右斜め前。  
 女4 即断っすね。  
 女1 右斜め前。え、誰の？  
 女2 あたしの。あの小（こ）イケメン。  
 女3・4 ああ。  
 女1 小（こ）って何。  
 女2 平均にちよこつと上乘せのな？五段階だと三・三的な？神様おまけ  
 してくれちゃったね的なの？  
 女3・4 わかる。  
 女1 言うね。  
 女2 だって別に、顔じゃないし。  
 女3 え、じゃあ何ですか？  
 女2 呼吸、みたいな？  
 女1・3・4 おお。  
 女4 この短時間で呼吸とは。  
 女2 いや、実はさっきね。  
 女1 うん。／ 女3・4 はい。  
 女2 テーブルの下で足がぶつかって。あ、って思ったら、そのままピタ  
 ッと。  
 女1 ええ。／ 女3・4 ええ。  
 女2 そのまますつと、足寄せ合いなから。  
 女1 えええ。／ 女3・4 ひゅう。  
 女1 あんたそれ、大丈夫？ お持ち帰りオフアーじゃないの？  
 女2 違うんじゃないかな。うん、たぶん。目でね、わかるの。本気かも。  
 女1・3・4 やだあ。  
 女1 この、肉食系、肉食系。  
 女2 やだ、草だって魚だって食べるから。  
 女4 雑食系、雑食系。  
 女2 やだ、ちよつと、やめて、やめてったら。  
 女3 姫先輩は誰なんですか？

女2 右斜め前でしょ。

女1 はあ？あんと一緒に、

女2 姫の、右斜め前。

女4 あ、王様っすね。

女3 ああ、ああ、ああ。

女2 姫わかりやすいから。

女1 やだ、バレてる？ 漏れてる？ ダダ漏れしてる？ うそ、あれま、ちよつとやんだ、こっ恥ずかしい。

女4 出た、茨城。

女3 先輩、それNG。

女2 いいんじゃない、幹事同士で。あ、実はもうデキてたり？

女1 まだだもん。

女3・4 ひゅう。

女2 何、結構いい感じじゃん。

女1 ほら、幹事だから。段取り的な？業務的な？やりとりのな？調整的な？そういう、何ていうの、ほら、もう、ねえ、あはは。

女2 ザ・言いよどんでる。

女2・3・4 かわいい。

女2 ほら見て、こちらへんかわいい、こちらへん。

女3 ああ、ほんとだ、ほんとだ。

女4 やばい姫、萌え、超萌え。

女1 うるっさい。いいの、あたしのことは。ね、ね、あんたたちは。

女3 あたしは、実は、姫先輩の隣の。

女1 ああ、あのデスクの引き出しに使わないボールペンいっぱいため込んでそうなの。

女2・4 わかる。／ 女3 ええ。

女2 いつの間にかみんなのボールペンがそこに集結してんのよね。

女1 あんたは？

女4 自分は、向かい側の。

女1 ああ、あのうっかり部長の愛人寝取って左遷されちゃいそうなの。

女2・3 わかる。／ 女4 ええ。

男2 男の嫉妬って怖いよね、特に中年越えるとほんとひどい。

女1 でもまあ、とりあえずそこそこまではいくかな。

女2・3・4 ああ、はいはいはい。

通りすがりの女、戻ってくる。  
手洗い場に割って入る。

通りすがりの女　でもね、昨日の巨人戦の話なんかされてもね。四番・坂本、打ちましたねって。誰よ、坂本って言ったたら九じやない？　四番って言ったたら原じゃない？　そしたらね、その原がいま監督なんですよって、マタギも小出さんも大笑い。いいじゃない、ねえ、私の中の永遠の四番は原なんだから。すぐそうやってからかうの。ほんと、いくつになっても男の人って子供よね。でもだから仕方ないなって思っちゃうんだけど。あたしもね、（ハンカチを口にくわえ、何かを喋りながら手を洗う。）ね。みんな素敵。

通りすがりの女、行く。

女1　さてと。

女2　行きますか。

女3・4　はい。

3

居酒屋の男たち。

男1　じゃああれだ。俺も言う。言わせていただく。  
男2　はいどうぞ。

男1　おまえのあの山手線ゲームなんだ。古今東西ローマ英雄列伝って。そんなのリズムにもならねえし、第一ぐるぐる回せるかよ。

男2　そうですか？　結構出たじゃないですか、シーザーとか、ハンニバルの山越えとか。

男3　割と盛り上がりましたね。

男4　先輩もファインプレーで。

男2　そうそう、あの時の王様、マジ光ってましたよ。ハンニバルの天城越えって。な。

男3・4　はい。

男3　確かに、ヘラクレスはカブトムシですよ。

男4　大カトーと小カトーいたら、そりや中カトーだっついていしかるべき。ユダっついたら南斗だし。

男3　ナントって何ですか？

男4　え、

男2　おまえ知らないの？アタタタだよ、北斗の拳。

男3 ああ、パチンコの。  
男2 アニメだよ。え、何、お前本気で知らないの？ジャンプだよ、名作だよ？  
男3 すいません。  
男2 勉強が足りん。帰り、ブックオフに寄って大人買いしろ。  
男3 はい。  
男1 中（ちゅう）カトーはいないのかよ。  
男2 え？  
男1 中カトーはいないのかって聞いてんだよ。  
男4 ああ、大カトー小カトー。  
男2 いや、だから、なあ。  
男3 小は大の曾孫だから、中は、何でしょうね。  
男4 親カトー、子カトーかな。  
男1 何で歴史にしたの？  
男2 え？  
男1 何で歴史にしたのって聞いているの。ヒローンさん。  
男2 いや、まあ。  
男1 俺は歴史が苦手なの。何でもっと一般的なのにしないわけ？ 国とかさ、ミュージシャンとかさ。  
男2 俺、音楽知らないんで。  
男1 出た。それだよ。そういうところ。よく知らないからって、自分の得意分野に寄せる、ふつう？  
男2 でも何でもいいからお題出させて俺に言ったの、王様ですよ。  
男1 だったらなおさら、俺の出したパスを有効に使えよ。じゃあ何が好き、王様？とかさ。昨日何を見た？とかさ。聞けるじゃん、振れるじゃん。そうすれば、もっとみんなで共有できる、一般的な選択肢が出るかもじゃん。  
男2 すみません。

マスター、現れる。

マスター おかわり、お持ちしますか。  
男2 あ、じゃあ俺ナマ。  
男3 僕も。  
男4 自分も。  
男2 王様は？  
マスター 瓶ビールで。  
男1 俺が決めるんだよ。いいよ、ナマで。何でもいいよ。

マスター　かしこまりました。はい素直にナマ四つ。(行く)

男2　ここマスター一人だよね？

男1　いいか、お前ら。合コンってのはな、チームワークなんだよ。俺が俺がじゃ絶対に駄目だ。と同時に、受け身の姿勢でも駄目だ。まず主体的にフィールドに立つ。それからパス回しだ。お互いの魅力が伝わるように、かつあからさまにはならないように、上げ下げのバランスを取りながら仲間について語る。上げるばかりじゃだめだし、下げるばかりでも当然だめだ。

男2　褒めたりけなしたり。

男1　分かりやすく言うそうだな。

男3　褒める？

男1　何でもいいんだよ。ある特色を、褒める方で使ってもいいし、けなす方で使ってもいい。歴史オタクって言うとな面倒くさそうだけど、歴史マニアっていうと奥深そうだろ。

男2　どっちも嫌だな。

男1　例えばの話だよ。そこ引かかるな。要は、全体のバランスを見ろってこと。個人プレーに走るんじゃないってさ。

男3　はい。

男4　勉強になります。

男2　でも王様、それ。

男1　何？

男2　合コンじゃなくて、接待の極意なんじゃないですか。上げたり下げたり、バランス見たり。

男1　そんなことないよ。

男2　でも俺たちそんなふうと思ってないですもん。なあ。

男3　ああ、まあ。

男4　女の子と楽しく過ごせれば、それで。

男2　そう、まずは楽しまなくちゃ。

男1　これだ。駄目だ、おまえらとは話が合わん。哲学がない。

男2　合コンの？

男1　人付き合いのだよ。もういい、マスター、お愛想。

男2　ちよつと、王様。

男3　すいません、先輩、本当、すいません。

男1　謝りやいいってもんじゃない。

男4　いやもう、本当、幹事おつかれさまです。

男1　今？今言う？遅いよね、もう。その話題過ぎたよね、さっき。もう、何？二十分くらい前？

男3　いやもう、自分は何も考えず楽しんでただけで。本当、すいません。

男4 セッティング、ありがとうございます。  
男2 ほら、後輩に気、遣わせてますよ。  
男1 おまえはもつと気、遣えよ。

マスター、現れ、

マスター お会計、ゾロ目で三千三百三十三円。

男2 ああ、いいから、まだいいから。

マスター あれ、でも、

男2 いい、いいから、

マスター ゾロ目ですよ？

男2 そこじゃない。

男4 すみません、あと追加で、お新香一つ。

マスター かしこまりました。お新香一つ。はいよ。(行く)

男2 いやだから一人でしょ？

男1 ったくよ。

男3 まあまあまあ。

男2 王様、姫ちゃんにメール打って見たらどうですか？

男1 俺が？

男2 他に誰が。

男1 いや、いい。もうきつと俺は駄目だ。せっかく幹事で上げた株も、

あの数時間で底値を打った。今や彼女の中で俺はブラック企業だ。

解約リストに上がってる。いや、違うな、多分もうあらゆるファイ

ルから消された上に、シュレッダーで木端微塵だ。

男2 ネガティブだな。

男4 先輩、こんな人だったんですね。

男1 繊細なの。感じやすいの。大事にしてよ、もう少しさ。こう、ガラ

ス細工をもてあそぶように。

男2 もてあそんじゃダメでしょ。

男1 ああ、姫ちゃん。もう会えないのかな。かわいかったな。いいな。

会いたいな。二人つきりで、雰囲気の良いバーとかでさ、仕事の話

とかさ、好きな映画の話とかさ。マスター、この子に合うカクテル

つくってよ、素敵なやつね、とか言っちゃってさ。

男3 妄想ですね。

男1 おまえだってあのゆるふわとどっか行ったりしたいだろ。クレープ

食べながらサンリオピューロランドとか行ってみたいだろ。

男2 高校生か。

マスター、現れる。

マスター ごめんなさい、お新香終わっちゃって。

男4 ええ、もう。何ならあるの。

マスター たこ焼き、とかですかね。

男2 全然違うし。

男4 こう、さっぱりしたいんだけど。

マスター さっぱり。じゃあ、茄子の一本漬けとか。

男2 あんじゃん、お新香。

マスター いや、それとこれとは別問題で。

男2 別問題って。

男4 いいよ、何でも。とにかくそれ。

マスター かしこまりました。はいさっぱりしたくて茄子一本。(行く)

男2 動機はいいだろ。

男1 ああ、せめてお友達になりたかったな。

男2 王様、そんなに言うなら、やっぱメール入れましょう。

男1 えええ。

男3 ですね。僕たちも入れますから。

男1 何？ おまえらも赤外線ピッピしたの？

男3 はい。

男4 ビローン先輩がやってるの見て、じゃあ僕もって。

男1 じゃああの、軍艦巻きに？

男4 超高級イカオクラですけど。

男1 何だよピッピ、いいなピッピ。

男2 王様は元から姫の知ってたんだからいいじゃないですか。

男1 ええだって、ピッピしたいじゃん、コミュニケーションとりたいたいじゃん。

男2 だからほら、これからメール。

男1 やだ。だってもう額面割れだし。

男2 株ネタやめましょうよ。仕事思い出す。

男1 ああそうだ。どうせ俺は仕事の鬼だ。私生活なんて何もない。これまでも、これからも。企業戦士として生き、幸せも知らず、愛も知らず、一人ひっそり過労死で死んでいくんだ。

男2 王様。

男1 いやだ、そんな人生、いやだ。

男3 先輩。

男4 大丈夫ですって。



マスター、現れる。

マスター はい、超特急で茄子お持ち。さっぱりしてね。(奥へ) え、何、どうしたの？(行く)

男2 だから一人じゃんで。

男1 俺さ、久しぶりに恋、できるかなと思ったんだ。だからさ。

男2 俺も。

男3 僕も。

男4 自分もです。

男1 ちよつと、張り切りすぎちゃった。ごめんね。

男2・3・4 王様。

4

トイレで女たちが化粧直しをしている。

女1 信じられない。

女2 ありえない。

女3 マジ腹立つ。

女4 ないっすね。

女1 何なの、あの目隠し王様ゲームって。

女2 最低。

女4 キモい、手にチュウされた。

女2 あたしも。／ 女3 あたしも。

女1 あたしもビローンに、愛してる、結婚しようって言われた。

女2 ええ、ちよつと、何それ？

女1 だからあんたと間違えたんでしょ。

女4 何すかそれ。

女3 へこすぎる。

女2 あたしも王様に口説かれた。

女1 え、ちよつと、

女2 だからこつちもあんたと間違えたんでしょ。

女1 あ、そっか。

女2 ああ、もう。

女3 バカ。

女4 まじ、きしよい。

女1　ねえ。  
女2　何？  
女1　王様、何て言ってた？

通りすがりの女、現れる。

通りすがりの女　もう、広いお店ね。探し物だけで大冒険。どこ行っちゃったのかしら。ない、ない、ないと。ふちがレースなのよ、カメの刺繍の。あら、カメ？　カエル？　アユ？　サンマ？　いずれにせよ泳いでるのは確かね。奥山さんにいただいたんだけど。あ、奥山さんはマタギの方ね。ああ、でもきつと、モノの切れ目は縁の切れ目。忘れた方がいいってことね。奥山さんとは一夜の恋。奥山さんとは、あら、一夜？　一夜、二夜……数じゃない。でも数も一つの目安よね。でもだって、小出さん素敵なんだもん。ああ苦しい。奥山さん、小出さん、奥山さん、小出さん。近くのマタギと、遠い虹。

通りすがりの女、行く。

女1　で？  
女2　あ？　ああ、気になる？  
女1　まあ、多少は？  
女2　大好きだ、好きで好きでたまらない、大大大好き、大好き姫ちゃんて。  
女1　あっそ。  
女3　あーあ。  
女4　バカっすね。  
女2　あれ。  
女1　何。

女2　見て見て。ほら、ちよつとここんどこ、笑ってる。  
女3　あ、ほんとだ。

女4　ザ・ポーカーフェイスを試みて失敗じゃないすか。

女3　やだ、かわいい、姫先輩。

女1　うるさい、うるさい、

女2　かわいい、かわいい。／女3　やばい、やばい。／女4　萌えっす、マジ萌えっす。

女1　やめ、やめやめ、やめれって。そういうあんた（女2）だっご機嫌じゃない。

女2 え、いいの、あたしは。  
女3 あれ、先輩。  
女1 ほら、見て見て、こちらへん、こちらへん。  
女3 あ、幸せオーラにじみ出し。  
女2 肉食、肉食。／ 女3 はらぺこ、はらぺこ。／ 女4 食い道楽、  
食い道楽。  
女2 バカバカ、うるさい、うるさい、うるさい。  
女1 あんたたちもでしょ。  
女3・4 ええ（見合い、照れ）はい。  
女1 やだ、もう、このこのこの。／ 女2 このはらぺこ、はらぺこあ  
おむし。／ 女3 やめてくださいよ、やめてくださいってば。／ 女  
4 いいんです、たまにはいいんです。  
女1 何だ、みんなよろしくやってんじやない。  
女2・3・4 えへへへへ。

女1の携帯に着信。

女1 あら。  
女2 何なに、男？  
女1 んなわけないでしょ。（見て）げ、部長からだ。  
女2 ええ、もうムシムシ。  
女3 お取込みなうです。  
女4 気合でシカトつす、先輩。  
女1 （切る）脱・ワーカホリック宣言。（拍手）  
女2・3・4 ブラボー、ブラボー。（拍手）  
女2 気合があれば、何でもできる。1, 2, 3、  
女たち ダーッ。

女2の携帯に電話。

女2 何？  
女1 もう。  
女2 ちょっと待って、部長から。（出て）もしもし。……社長が亡くな  
った？  
女1・3・4 え？  
女2 はい……はい。ええ、います。はい、三人とも。はい……お通夜の  
準備に戻れって。はい。（切る）  
女たち ……

女2 どうする？

女1 何でみんないるって言っちゃったのよ。

女2 だって今日四人で一緒に出たじゃない。

女1 だからって売るか仲間？

女2 売ってない、客観的事実を述べただけ。

女3 先輩、

女1 電話に出たのあんたじゃない。あんた一人で戻りなさいよ。

女2 だってみんな一緒だって言っちゃったもん。

女1 とりあえず私だけ来ましたとか何とか言って、先に行って場つなぐとかできるでしょ。

女2 あんたたちそれでほんとに後から来るの？

女1 そんなのわかるわけじゃないじゃんさ。

女3 先輩、／ 女4 まあまあまあ。

女1 もう、やだ、やだ、やだやだやだやだ。だってもうちよつと、もうちよつとなんだもん。もうちよつとだけでも、もうちよつとだけでも。

女3・4 ああ、ああ、ああ、

女2 だからごめん、ごめんってば。

通りすがりの女、現れる。

通りすがりの女 どうする、私、二兎を追う？ ううん、それはウサギに失礼だわ。夢を追う？ 安らぎを守る？ 安らぎ？ 嫌だ、私ったら、らしくない。夢を追う戦いこそが我が人生。答えはもう見えてるじゃない。ああ、でもわかる。きつと怖かったのね。ほら、追うってとっても疲れるじゃない？ だから安らぎをどこか手近なところに置いておきたかったのね。でもそれって安らぎに失礼だわ。夢を追うために安らがせろなんて、マタギを何だと思ってるの？ 私ったらエゴイスト。

通りすがりの女、行く。

女1 わかった。行こう。

女2 いいの？

女1 いいの。仕事は仕事、恋は恋。両立するのが大人の女。

女2 姫。

女1 二兎を追う者、五兎を得て、アブハチとするもの、  
女2 よっ。

女1 泣き笑い。  
女2・3・4 姫。  
女1 ああ。しゃあない。行こっか。  
女2 うん。／ 女3・4 はい。

5

男たちの居酒屋。

男1 姬ちゃん、姬ちゃん、姬ちゃん。  
男2 泣かないの、ほらちゃんと座って。  
男3 先輩、職場とのギャップ半端ないですね。  
男4 完全に酒に吞まれてる。  
男1 ねえ、今タチ悪いって思ったでしょ。思ったでしょ。ほら、顔に書いてある。こことこことここ。すげえ太い、極太で。あ、あれだ、ニュー YORK の、ダウンタウンの壁の落書きだ。セクシイとか、ゴッドとか。ヘイヨウ、俺たち下町生まれ。  
男2 ウォールペイントね。  
男3 タクシー呼びますか。  
男1 タクシー呼んでどうするの。俺をお持ち帰りするの。助けて、誰か、俺この人たちにお持ち、お持ち帰られる。お持ち、帰られる。  
男4 先輩、とりあえず立ちましよう。

マスター、現れる。

マスター すみません、お飲みものラストオーダーなんですけど。  
男2 状況見える？  
マスター 楽しそう。  
男3 いいから、ごめん、お会計。  
マスター はい、毎度。

マスター、行く。

男1 (歌う) 開きかけてた心の扉 扉の隙間に鎖鍵  
鍵を預けたあの子はいずこ  
笑う二日月 闇夜にや暗い

男2 まいったな。  
男1 姫ちゃん。姫ちゃん。どこへ行ったの、姫ちゃん。  
男4 頼みますよ、先輩。  
男3 僕、払ってきます。

メール着信。

男4 ん？  
男3 メールだ。(二人、携帯を見る)  
男2 おい、いいから先、  
男3 待ってください。先輩、これ。  
男4 こっちもです。  
男2 何？ てことは。(携帯を見る) ロザラインちゃんだ。  
男3・4 おおおお。  
男2 勇気出してピッピした甲斐、あったな。  
男4 はい。  
男3 あ、てことは、  
男4 先輩、先輩、  
男1 んあ？  
男4 携帯見てください、携帯。たぶんメール来てますから。  
男1 何だ携帯って。俺は携帯、不携帯主義だ。鳴っても出ない。鳴らし  
ても出させない。相手が出る前に切っちゃうんだもんねえだ。はい  
もしもブチ。すごくね？ これすげえテクニクいるんだぜ。ちゃ  
んとなあ、  
男4 何でもいいですから。  
男2 さつき確かポッケに。  
男1 あつ、スリ集団です、スリ集団ですよ。泥棒、泥棒。  
男2 あつた。

男四人、覗きこむ。

男2 無い。  
男3 電波、悪いのかも。  
男4 でもほら、アンテナバリバリつすよ。  
男1 一人暮らしで孤独死か。六畳一間で息絶えて、一ヶ月床に転がるん  
だ。ある日大家がやってきて、トントン、王様、家賃滞納してます  
よ。あら、おかしいわね、嫌な臭い。  
男2 来た。モシモシヒメヨヒメチャンヨ。姫ちゃんからだ。

男 1 貸せ。(取る)

男四人、覗きこむ。

男 3 (読み) 今度は二人で会いましょう。素敵なバーとか行きたいな。  
目隠したら、そのままスマキで東京湾に沈めます。ご連絡お待ち  
しております。

男 3・4 先輩。

男 2 らしいな。

男 1 やった。

男 2 王様。

男 1 ビローン。

男四人 万歳、万歳、万歳。

マスター、現れる。

マスター あの、お会計を。

男 1 何言ってんだ馬鹿野郎、祝杯だ。酒じゃんじゃん持ってこい。

通りすがりの女、現れる。

通りすがりの女 ごめんください、待ち合わせで。

マスター すいません、もうラストオーダー、

男 1 知ったことか、ラストを変えろ。じゃなかったら時間を変えろ。世  
界中の時計を回せ。

男 2 出た、理不尽。

通りすがりの女 え、何、お祭り？

男 1 地球よ回れ。歴史よ動け。ヘラクレスが何だ、ハンニバルが何だ。  
過去を見すぎて歩みを止めるな、未来は常に前にある。未来のため  
に過去を見る。新たな歴史の幕開けだ。歴史は俺だ。俺は、王様だ。

男 2 よつ、王様。

一同 日本一。

## 『十二夜』

※枠で囲まれている部分は、実際の上演環境に合わせて変更すること。

1

まこと（トービー）と綾田（フェステ）、現れる。

二人  
やあ。

トービー  
さいうまことです。

フェステ  
綾田將二です。二人合わせて、

二人  
あやだまことです。

フェステ  
はい、今回は『十二夜』。

トービー  
『十二夜』。

フェステ  
まこっちゃん、ご存知ですか、十二夜。

トービー  
十五夜みたいなもんですか。

フェステ  
満月でね、おだんご食べて兎がピョン、って違うから。十二

夜ですよ、十二夜。

トービー  
三つ足りない。

フェステ  
足りないどころか全然違う。国が違う、文化が違う。

トービー  
あら。

フェステ  
十二夜っていうのは、キリスト教を信仰する地域の風習で、

クリスマスから数えて十二番目の夜、つまり一月六日の夜に

行われるお祭りのこと。

トービー  
なるほどね、そしてその日にお月見を。

フェステ  
違います。お月見から離れてください。ベツレヘムの地、十

二月二十五日に処女マリアより生まれいるは幼子イエス。

そこから数え十二番目の夜。さあ何日？

トービー  
ええと、（数える）一月六日？

フェステ  
そう。その日の夜に、東の方（かた）より三人の博士が星を

頼りにやってきて、イエスを神と呼びました。

トービー  
ほう。

フェステ  
この十二番目の夜を記念して、お祭りが行われるようになったのです。

トービー  
それが十二夜。

フェステ  
クリスマスから飲めや歌えのどんちゃん騒ぎが始まって、年





フェステ　　そうか、ヤバい、今日からだ。  
トービー　　台本忘れた。

フェステ　　俺も家だ。ちゃんと読んでたのに。  
マルヴオーリオ　　だらしがない。  
フェステ　　すみません。

トービー　　つね先輩、大変恐れ入りますが、台本お借りできますでしょうか。

フェステ　　あ、俺も。

トービー　　コピーさせてください。

フェステ　　コピーとってきます。

マルヴオーリオ　　断わる。自分のおしりは自分でふく。それが大人への  
　　第一歩。

トービー・フェステ　　つねさん。

マルヴオーリオ　　マルヴオーリオ。  
トービー　　え？

マルヴオーリオ　　（無視する）

フェステ　　だめだ、まこっちゃん。稽古初日のつねさんはもうつねさん  
　　じゃない。つねさんであると同時に、つねさん演じる役でも  
　　ある。いわゆる虚実皮膜だ。

トービー　　きよじつひまく？

フェステ　　ああ、もう。江戸時代、近松門左衛門の芸術論ですよ。虚構  
　　の虚、現実の実、皮に膜。自分と役との境界線の、薄皮一枚  
　　の上に芸がある。

トービー　　へえ。

マルヴオーリオ　　おやめになったらいかがですか？  
トービー　　え？

マルヴオーリオ　　劇団をです。芝居をです。演劇なんておやめなさい。  
　　実家に帰って稼業をつぐか、知り合いのコネで、家族経営の  
　　中小企業に雇って頂きなさい。あ、でも、稽古初日に台本を  
　　忘れるようなずさんな姿勢で生きる方は、どこの会社にいっ  
　　ても使えなくて持て余されるでしょうね。残念。残念な人生。  
　　意地悪だ。

トービー　　マルヴオーリオだからです。

フェステ　　違う。今のはマルヴオーリオの皮をかぶったつねさんにすぎ  
　　ない。役を隠れ蓑にしてダメ出しをするなんて、褒められる  
　　ことじゃないですよ。あんたなんかつねさんでもマルヴオー  
　　リオでもない。つねヴォーリオだ。

マルヴオーリオ　　マルヴオーリオだ。さあ、稽古を始めよう。君は使え

ない飲んでくれの貴族トービー、君は無能な道化のフェステ、私は輝く執事マルヴォーリオ。そして美しきオリヴィアは。  
マライア（声） お嬢さま。

オリヴィア（座長）、マライアを連れて現れる。

オリヴィア いけない、いけないったら。どうしたっていうの、突然。

トービー・フェステ 座長。

マルヴォーリオ お嬢さま。

オリヴィア 心臓が痛い。ここは山？ 空気が薄い。息が苦しくてならない。

トービー （マライアに）どうしたの？

マライア ずっと言い寄って来てたマツチヨな公爵、いたじゃない？ その使いに惚れちゃったのよ。

マルヴォーリオ えっ。

オリヴィア いけません。だってあの人は召使。身分違いの恋。早まってはいけない、落ち着いて。ああ、だめ。あの人の主人と入れ替わってくればいいのに。ああ、セザーリオ。

トービー どんな人？

マライア 線が細くて、髪の毛くるくる、若くてきれいな男の子。

オリヴィア 我が愛しのセザーリオ。はしたなさなど知るものか。私は恋に落ちました。心から願う。この腕に抱かせて。

フェステ・トービー 座長、

マライア・トービー・フェステ フォーリン・ラブ。

## 2

フェステ、ひとり。

フェステ いいな、恋。してないな、恋。ひとりっつのは気楽だけど、誰かを思いながら暮らすっていうのも、切なくていいよね。

オリヴィア、現れる。

オリヴィア ああ、愛してる、愛してる。遠い。あなたが遠いの。これは霧？いえ涙。世界が水でうるおってるわ。待って、ノアの方

舟。ああ、でもつがいしか乗せてくれないの。私に乗る資格はない。溺れる。お願い、誰か救って。

オリヴィア、行く。

フェステ

秋はだめだな。特に夜。ときどき無性に寂しくなる。会いたいな、でも誰に？ ごはんはおいしくなるけどさ、憂いと体重が増しちゃうのは勘弁。

トービー

(声)

フェステ。

トービーとマライア来る。

フェステ

はい。

居た居た。向こうでお嬢さまが呼んでたぞ。セザーリオを呼び戻せって。

フェステ

また？

マライア

今日、これで何回目？

フェステ

三十五回目。行ってきます。(行く)

トービー

・マライア　いつてらっしゃい。

トービー

恋に落ちたはいいけれど、こう振り回されるんじゃ大変だ。

マライア

向こうもよく付き合うわ。

トービー

マライア。

マライア

だめ。仕事中。

トービー

俺は仕事中じゃないもん。

マライア

くさ。酒くさ。

トービー

酒を飲むのが僕のお仕事。

マライア

マルヴオーリオに追い出されるよ。

トービー

知らないよ、あんなやつ。執事のくせに、偉そうに。

マライア

お嬢さまが信頼してるの。

トービー

信頼すべきはこの私、サー・トービー・ベルチだろう。

マライア

朝から奈良漬になってるような人に何を頼れつつうの。

トービー

だってほら、血縁じゃん？ おじさんじゃん？

マライア

せめて昼間はひかえなさいよ。

トービー

やだよ、やだよだ。酒無しで生きる人生なんて、お日様のな

マライア

い青空とおんなじだ。君のいない夜とおんなじだ。

マライア

(照れて) やだ。

フェステ、戻る。

フェステ ただいま。

トービー あれ。

マライア 早かったね。

フェステ マルヴオーリオに、仕事とられた。

マライア えー。

トービー なんだあいつ。

フェステ 「このようになつまらぬ道化、いつまでおそばに置くおつもりか？ 去（い）ね」

トービー なんだそれ。

フェステ 意地悪だな。

マライア やきもち。

トービー・フェステ なんで？

マライア マルヴオーリオはお嬢さまが頼る相手を自分一人にしたいの。独占欲。私だって目の敵にされるんだから。

フェステ えー。

トービー でも侍女の仕事はさすがにできないでしょ。

マライア だからかえって羨ましいの。お嬢さまの髪をとかしたり、お召し替えの手伝いをしたり。お嬢さまのことは自分一人でもやりたい。

トービー 気持ち悪い。

フェステ 屋敷もあいつに仕切られてるしな。

トービー そうなんだよ。まるで主人だ。

マライア 酒ばかり飲んでるからよ。

トービー そうだけど。君と離れる時間が辛くて。

マライア （照れて）やだ。

オリヴィア、来る。

オリヴィア 好き、好き、ああ、好き。世界の破滅？知らないわ。いつの

間に破滅していたの？だって私の炎は燃えたまま。あなたへの愛を薪（まき）にして。あなたがこの世に居る限り、私の囲炉裏はお湯がしゅんしゅん沸いたまま。ただいま、おまえ。おかえりなさい、あなた。

オリヴィア、行く。

マライア

女主人があゝの状態。

フェステ

このままだとマルヴォーリオに乗っ取られますよ。あなたも僕も、追い出されるのは時間の問題。

トービー

えー、やだやだ。それは困る。どうしたらいい？ ねえ、マライア。

マライア

えー、どうしたらって。

フェステ

お嬢さまの、やつへの信頼度を下げればいい。

トービー

それだ。でもどうやって？

マライア

お嬢さまの前で、あいつが奇行に及ぶとか。

トービー

それだ。でもどうしたら？

フェステ

お嬢さまへの愛を打ち明けさせる。

トービー

それだ。でもやるかなあいつ？

フェステ

少しは自分で考えなさいよ。

マライア

あ。

トービー・フェステ 何？

マライア

あたし、お嬢さまとそっくりな字書ける。だから、お嬢さまからあいつあてのラブレターを、偽造するってのはどう？

トービー

ラブレター。

マライア

マルヴォーリオへの愛の言葉を、あることないこと書き散らす。それを見たマルヴォーリオは相思相愛と勘違いして。

フェステ

「愛してる、オリヴィア」

トービー・マライア (拍手)

トービー

いいじゃない。でもどうやって奴の手に届ける？

マライア

あいつ、いつも昼食後に庭を散歩するのよ。そのときに目立つところに落としておけば。

フェステ

榆の木の下がいい。あいつ、いつもそこで一休みするんだ。

トービー

さすがおまえら。愛する女と愛しい友よ。

マライア

あたしの部屋へ。

フェステ

ついていきます。

三人、行く。

3

トービー、マライア、フェステ通過。

三人、戻って来て隠れる。

マルヴォーリオ、現れる。

フェステ、姿を現す。

フェステ　ごきげんよう。お散歩中？  
マルヴオーリオ　まだ居たのか。

マルヴオーリオ、通り過ぎる。  
三人、マルヴオーリオの行った方向を見る。  
三人、再び隠れる。  
オリヴィア、現れる。

オリヴィア　焼ける。焼けるわ。愛の炎で焼けてしまう。火事よ、大火事。  
私が火事。誰か水を、この胸に。

オリヴィア行く。  
三人が姿を現そうとしたところに、オリヴィアまた戻る。  
マライア、相手をする。

オリヴィア　人間は何でできている？　水、細胞、DNA。違う。愛でできている。水だの細胞だのは部分よ。全体をまとめあげるのは愛。愛に動かされている今の私は完璧な生命体。そうでしょう？

マライア　そうですね。

オリヴィア、行く。  
マライア、隠れる。  
マルヴオーリオ、再び現れる。足を止め、戻って行く。  
三人、再びマルヴオーリオの行った方向を見る。  
小さくガッツポーズ。  
三人、再び隠れる。  
マルヴオーリオ、手紙を手にして戻る。  
フェステ、姿を現わす。

フェステ　ごきげんよう。  
マルヴオーリオ　（手紙を隠し）何？  
フェステ　見て。身に染みわたるほどの青空。こんな日に愛の告白なんて受けたら、幸せだろうな。ラブレターなんかで。あつごめ

んなさい。お散歩中にお邪魔しちゃった。失礼します。

フェステ、行く。

トービーとマライアも、姿を隠したまま行く。  
マルヴオーリオ、隠し持っていた手紙を出す。

マルヴオーリオ これは明らかにお嬢さまの字。

「愛しのMへ」

誰だM。お嬢さまが追いかけてる若造はセザーリオ、Mはな  
い。となるとこのマルヴオー……いやいやいや、ないことも  
ないってだけで、世の中にMはごまんという。可能性、あく  
まで可能性。

（あたりをうかがい）落ちてたってことは、誰かが拾って中  
を見る可能性もあるわけで。

（手紙を開く）

「あなたが好き 誰よりも好き

空を見ても あなた

星を見ても あなた

夢を見ても あなた

ああ ああ 愛しいあなた

つらいのは 身分違いの恋

せめてかたく抱きしめて 愛してるって言って

愛をこめて あなたのO（オー）より」

お嬢さま、お嬢さま、お嬢さま。お嬢さま。

マルヴオーリオ、行く。

4

トービー、フェステ、マライア来る。

マルヴオーリオの行った方向を見る。

三人

トービー

フェステ

マライア

トービー

うえい、うえい、うえーい。

こんなにうまくいくとはな。

「まんまと」っていう言葉通りの展開ですね。

人間のつくりがシンプルなのよ。

これからどうする？



マライア 見張るのよ。お嬢さまとのファーストコンタクトを逃さないように。  
トービー そうだな。

マルヴオーリオ、来ている。

マルヴオーリオ 君たち。

三人 (驚く)

トービー びっくりした。

マライア どうしました？

マルヴオーリオ お嬢さまはどちらに？

マライア さあ。

フェステ さつき、庭で見ましたよ。

マルヴオーリオ 庭か。ありがとう。(行く)

フェステ どういたしまして。行動早いな。

マライア ネジがフルにまかれた感じ。

トービー お嬢さまとはちあわせしたとして、その後どうする？

マライア どうしよう。

フェステ お嬢さまの信頼がそこなわれるように、うまくもっていかないと。

マルヴオーリオ、来ている。

マルヴオーリオ 君たち。

三人 (驚く)

マルヴオーリオ 見当たらなかった。すまないが、もし見かけたら、呼

んでくれないか。

マライア かしこまりました。

マルヴオーリオ ありがとう。お伝えしたいことがあつて。

マルヴオーリオ、行く。

フェステ 時間の問題だ。

トービー 要は、俺たちが仕組んだってバレなきやいいんだよな？

マライア・フェステ そうそうそう。

トービー じゃあ簡単だ。ばつくれればいいんだよ。

マライア でもお嬢さまには、私が書いたってバレちゃう。侍女の中で私だけだもん、お嬢さまの字を真似できるの。

トービー　　そうか。

フェステ　　じゃあこういうのは？　お嬢さまも味方につける。

トービー・マライア　　どうやって？

フェステ　　マライアが、恋文の練習をしていたことにする。お嬢さまのかわりに、使いの若者に手紙を書くために。お嬢さまの叶わぬ恋を見るに見かねた行動。

トービー・マライア　　それだ。

マライア　　お嬢さまのためを思って、一生懸命書きました。

トービー　　マライア。

フェステ　　忠義な振る舞い。

オリヴィア（声）　マライア、マライア。

マライア　　はい、ここに。

オリヴィア、来る。

オリヴィア　　神父様を呼んできてちょうだい。裏の教会で婚約式を挙げます。

マライア　　婚約式？

トービー　　あの使いと？

オリヴィア　　そうなのよ。あれだけかたくなだったのに、急にいいって言いだしたの。僕でよければ喜んでって、二つ返事。まるで別人。

トービー　　へえ。

オリヴィア　　早く外堀を埋めるわよ。あの人の気が変わらないうちに。

マライア　　かしこまりました。

フェステ　　お嬢さま。おめでとうございます。

オリヴィア　　ありがとう。ああ、幸せで息が苦しい。

オリヴィアとマライア、行く。

トービー　　タイミングを逃したな。

フェステ　　行きましょう。

二人、行く。

マルヴオーリオ、ひとり。

マルヴオーリオ　好きです。結婚してください。違うな。愛している、オリヴィア。妻になっていただきたい。これかな。オリヴィア。オリヴィア。

オリヴィア、現れる。機嫌がいい。

オリヴィア　なあに？

マルヴオーリオ　お嬢さま。

オリヴィア　どうしたの、仰々しく名前なんか呼んで。

マルヴオーリオ　確かに、お手紙受け取りました。

オリヴィア　手紙？

マルヴオーリオ　私もお嬢さまと同じ気持ちであります。共に歩んでいきましよう。

オリヴィア　そうね、これからもよろしく。(行こうとする)

マルヴオーリオ　あの。

オリヴィア　ごめんなさい、準備があるの。婚約式をするのよ。

マルヴオーリオ　婚約式。

オリヴィア　後でね。

オリヴィア、行く。

マルヴオーリオ　オリヴィア。私は間違っていなかった。

マライア、来る。

マライア　お嬢さまは？

マルヴオーリオ　いま、あちらに。

マライア　お嬢さま。指輪のサイズが。(行く)

マルヴオーリオ　私は20号だ。しまった、普段着だぞ。

マライア　(戻り、通過しつつ)ヴェールとドレス、ヴェールとドレス。

マルヴオーリオ　マライア。

マライア　はい。

マルヴオーリオ　すまないが、私のタキシードも用意してくれ。

マライア　何で？

マルヴオーリオ　何でって。正装だろう。

マライア　はあ。  
マルヴオーリオ　頼む。  
マライア　私が？  
マルヴオーリオ　（主人として）これから、よろしく。  
マライア　（気づき）はい。失礼します。

マライア、行く。

マルヴオーリオ　戸惑うよな。これまでの執事が、急に屋敷の主人だもんな。ちりんちりん、オリヴィアと私の部屋まで朝のお紅茶を。かしこまりました、旦那様。なんてな。ああ、楽しみだ。仕事もちゃんとするんだ。広大な領地。夜ごとの舞踏会。噂のまとなるぞ。ねえ知ってる？　あそこの執事のマルヴオーリオが、女主人のオリヴィア様のハートを射止めなすったのよ。ほら見て、あの綺麗な人。誰？　だから、あれがマルヴオーリオよ。やだ綺麗、あんな人と同じ屋根の下で寝起きしてたら、おかしくなっちゃうのも無理ないわ。本当ね、うらやましい。あたしも欲しい、綺麗な執事。差し上げます、綺麗な私。ああ、マルヴオーリオ。何て素敵な、輝かしい存在。

オリヴィア、来る。大混乱している。

オリヴィア　何てこと。ああ、何てこと。息が苦しい。フェステ。フェステ。

フェステ、トービー、マライア来る。

フェステ　はい、ここに。どうされました？  
マライア　お嬢さま。

オリヴィア　あの人が婚約などと言った覚えはないと言いついたの。消えたのよ、二つ返事が。空が割れて落ちてきたみたい。ねえ、お願い、どういふことか聞いてきてもらえない？  
フェステ　わかりました。

マルヴオーリオ　お嬢さま、私ならここに。

オリヴィア　大丈夫、ありがとう。若い人同士の方が話も早いと思うから。

フェステ、お願い。

フェステ　行ってきます。（行く）

オリヴィア これは何？ お天気雨？ いわゆる狐の嫁入りかしら？ だ  
といいけど、もしそうじゃなくて、本当の絶望だとしたら？  
だめ、もたない。私の心臓がもたない。

マルヴオーリオ お嬢さま。私がおります。

オリヴィア マルヴオーリオ。そうね、ありがとう。私が滝から飛び降り  
そうになっても、縄で大木に括り付けてちょうだいね。

マルヴオーリオ 愛してる。

オリヴィア 私もよ、マルヴオーリオ。

フェステ（声） お嬢さま、お嬢さま、お嬢さま。

フェステ、戻る。

オリヴィア どうだった？

フェステ どうもこうも。あの使いは、双子でした。

オリヴィア・マライア・トービー 双子？

フェステ

お嬢さまが口説いていた使いは、実は女で、主人である公爵  
を好きとのこと。で、さっき婚約をOKしたのは双子の兄。  
いま表で並んでますけど、そっくりで、見分けつきません。

一同、フェステの戻ってきた方向を見る。

オリヴィア 本当だ。

マライア そっくり。

トービー 手振ってる。おーい（振りかえす）はは、投げキッスしてる。

フェステ 兄の方だ。お嬢さまのこと、好きみたいです。

マライア どうします？

オリヴィア 困ったわ。こんな展開になるなんて。でも、そうね。（手を振  
りかえす）

マルヴオーリオ お嬢さま。

オリヴィア なあに？

マルヴオーリオ 私への思いは？

オリヴィア 感謝してるわよ。

マルヴオーリオ 私への愛は？

オリヴィア 愛してるわ。執事としてね。

マルヴオーリオ この手紙は？

オリヴィア 手紙？

トービー まずい。

マルヴオーリオ あなたから私への手紙です。愛しのMへ、あなたのOより。思わせぶりに落ちていた。違うとは言わせません。証拠となるはこの筆跡。

オリヴィア (見て) これ、私じゃないわ。マライア、あなた？

マライア え？

トービー ああ。

フェステ かな。

マルヴオーリオ え？

マライア・トービー・フェステ 申し訳ありません。

トービー この執事の出過ぎた真似を、少々懲らしめようとしたまで。

マルヴオーリオ 何？

フェステ さもないと、僕たち追い出されちゃいそうだったから。

マライア 書いたのは私です。

三人 すみません。

マルヴオーリオ おまえら、

オリヴィア まあ、よく回る悪知恵ね。発案者はどちら？

マライア ああ、その、

トービー 三人です。

マルヴオーリオ ああ。

オリヴィア おじさん。そういうときは「私です」でしょ？あなたが唯一

私と対等にものを喋れるんだから。何、連帯責任にしているの。

トービー すみません。

オリヴィア マライア。この人とつるむのはいいけど、頭の中までからめ

とられちゃだめよ。ろくでなしに手綱を握られるんじゃない

て、あなたが握るのよ。

マライア はい。

オリヴィア フェステ。この人たちと付き合ってくれてありがとう。楽し

かった？

フェステ 楽しかった。

オリヴィア 本当に、どうしようもない人たち。追いだしたところで、行

った先に迷惑がかかるわ。そしたらどうなる？ あの屋敷か

ら来た人間はどれもろくなもんじゃない。そう言われて恥を

かくのは私じゃなくて？

マライア はい。

トービー・フェステ・マライア 申し訳ありません。

マルヴオーリオ ろくでなしどもめ。

オリヴィア マルヴオーリオ。

マルヴオーリオ はい。

オリヴィア　ありがとう。あなたの気持ち、とっても嬉しい。大切な人。信頼してるし、愛してるわ。身分を越えて、立場を越えて。でもそれは恋ではない。わかるわね。

マルヴオーリオ　はい。

オリヴィア　私の恋は、あそこにある。もう奪われてしまったの。ここは空き家。忍び込んでも盗るものはない。激しい鼓動が告げている。この心の帰る場所はある人にあると。だからみなさん。恩赦です。

トービー　恩赦？

オリヴィア　今の私は機嫌がいいの。これからめでたい席だもの。屋敷だけじゃない、領地をあげてのお祭りよ。こんなときに、誰もいなくなってもらいたくないわ。

マライア　お嬢さま。

オリヴィア　マルヴオーリオ、あなたあつての私たちよ。協力してくれるわね。ほら、あなた方も。

トービー・マライア・フェステ　お願いします。

マルヴオーリオ　もちろんです。

オリヴィア　忙しくなるわよ。門をあけて、庭を解放して。力尽きるまで宴会よ。

トービー　オリヴィア。

オリヴィア　決めました。私、あの人と結婚します。ひよんなご縁でつながる絆。結んで見せます常世（とこよ）まで。

マルヴオーリオ　お嬢さま。

フェステ　ご結婚、

トービー・フェステ・マライア・マルヴオーリオ　おめでとうございます。

皆が行く中、マルヴオーリオ、ひとり残る。

マルヴオーリオ　だまされた。

フェステ、来る。

フェステ　つねさん。

マルヴオーリオ　綾田。

フェステ　帰ろう。

マルヴオーリオ　うん。

二人、行く。

## 『から騒ぎ』

※枠で囲まれている部分は、実際の上演環境に合わせて変更すること。

1

俳優1、現れる。

俳優1

こんにちは／こんばんはー。つねさんといいます。俳優です。初めましての方は、初めまして。そうでない方は、お久しぶりです。いやあ、暑いですねえ。ねえ。まいっちゃいますねえ。僕なんかもう、暑いのが弱くて。もうね、動く気になっちゃやう。あれ、わかりますね、暑い国の人たちが、シエスタって言って昼寝するの。仕事なんか絶対しない。店なんかのきなみシヤッター降りちゃう。だってねえ、一番暑い時間ですもんね。基本、昼間はあんまり出歩かない。その代り、日が沈んだらもう、街やたまり場に繰り出して、老いも若きもぶんちやかぶんちやか。子供から老人まで、あっちこっちで飲んだり食べたり喋ったり。えっじゃあいつ働くの？って感じでですけど、まあ、どうにかなっちゃうんでしょうね。働く人が、必要最低限なくらいに、適度に働いて。一方で、遊ぶ人は、適度以上に遊ぶ。人生を楽しむ。いいですね。何か、感覚的には、僕らは逆ですよ。たいがいの人が適度以上に働いて、余った時間でちよこっただけ、遊べるときに遊ぶ。(溜息)豊かさっていったいなんだろうなって、考えちゃいますよね。人生これ、社会の歯車。うむ。これはもうね、しょうがないですね。自由に見える芸術家だって、えらーい何かの先生だって、社会の大切な歯車の一つです。誰一人、例外は居ない。みんなどこでかみ合ってる。それで、場面によって、主になったり、従になったりして、いろんな人といろんな関係をつくりあげていくんです。それでね、そう、聞いて聞いて。僕、考えたの。何で人は恋をあんなにしたがるんだろうって。だってさ、別にしなくてもいいじゃん、恋なんて。好きだなんて思う人が出てくるまで一人で楽しく暮らしてたっていいじゃん。なのに、恋しなくちゃダメだぞって。余計なお世話ですよ。でもね、一つわかったこと。恋をする  
と、人は思いつきり、自分の感情に支配される。そして自分と



相手のことが考えの中央にくる。つまり、自分と相手を主役にした物語が展開されることになるんです。これです。恋をする  
と、社会の歯車にすぎない存在が、急に主役になれるんです。  
これはね、麻薬以上に麻薬ですよ。

俳優2、現れる。

俳優2 何やってんの。

俳優1 何って、ねえ。前説。

俳優2 何の。

俳優1 え？ えと、から騒ぎ。

俳優2 こんなところで？

俳優1 え？ だってここ、

俳優2 (警部として) 不審者発見、者ども、出会え出会え。

夜番1・2・3、「御用だ」「御用だ」と現れ、

俳優1を取り囲む。

俳優1 えっ、えっ、えっ？

警部 婚礼を明日に控えたレオナート殿の御屋敷前で、一人虚空に向  
かって呟く不審者を発見。聞けば何等かの陰謀に加担せしもの  
こと。夜番、間違いはないな。

夜番1 へい。

夜番2 さようで。

夜番3 この耳でしつかと。

俳優1 何が？ 何を？

警部 問答無用。ひとつとらえろ。

夜番たち (俳優1を捉え) 御用だ。

俳優1 ちよっと待ってよお。

警部 とつたり。

俳優1 えー。

夜番たち お見事。

2

俳優1、拘束されている。

夜番3、記録をとる。

俳優1

何も知らない。

警部

何も知らない。

夜番1

何も知らない。

夜番2

何も知らない。

夜番3

(記録し) 何も知らない、と。

俳優1

何もしてない。

警部

何もしてない。

夜番1

何もしてない。

夜番2

何もしてない。

夜番3

何もしてない、と。

俳優1

僕は無実だ。

警部

僕は無実だ。

夜番1

僕は

俳優1

あの、これ、やめませんか。

警部

うん、やめよう。わずらわしい。おまえたち、シー。

夜番1

シー。

夜番2

シー。

夜番3

シー、と。

警部

名前は。

俳優1

ナカジマです。

警部

ナカジマ。

夜番1

シー。

夜番2

シー。

夜番3

ナカジマ、シー。

警部

あそこで何をしていた。

俳優1

だから、前説です。

警部

マエセツとは何だ。

俳優1

ああ、その、お芝居が始まる前に、短いお話しをするんです。

あらすじだったり、季節や時事ネタだったり。落語で言う、マ

警部

マクラ……

夜番1

マクラ……

夜番2

マクラ

俳優1

ああ、いい、いい、そこ引っかからないで。マクラはわきに置

いといて。で、ここどこですか？

警部

取調室だ。レオナート殿が知事として治めるこのメシーナの治

安を預かるのが、

警部・夜番 1・2・3 我々、メシーナ・ジャッカル隊。

警部  
そしてその本部となる建物の、お勝手口から出て少し歩いて脇の小道をちよつと行ったところにある離れの東側に増築した部屋の裏側にある元馬屋を改造した納屋の地下にあるのが、この取調室だ。

俳優 1  
わからない。

警部  
そしてこれは、私の有能な部下だ。番号。

夜番 1  
いち。

夜番 2  
に。

夜番 3  
さん。

警部  
昔は五十人ほどいた部下もいまはたったの三人だ。わかるか。

治安が良くなったからだ。わかるか。多くの人数を割く必要がなくなったからだ。わかるか。これもみな、誰のおかげだ？

夜番 1・2・3 警部、警部、警部のおかげ、警部はすごい、警部は天才、

万歳、万歳、ばんざーい。

警部  
そういうことだ。わかったか。

俳優 1  
わからないよ。ねえ、これほどいてくださいよ。

ナカジマ、と言ったな。

警部  
はい。

俳優 1  
クニはどこだ。

警部  
日本です。

警部  
ニホン……

夜番 1  
ニホン……

俳優 1  
ああ、ええと、だいぶ遠いところです。っていうより、ここどこですか？

警部 1  
メシーナだ。

夜番 1  
イタリア半島がこうあって、

夜番 2  
シチリア島がこうあって、

夜番 3  
ここ。

警部  
レオナート殿が知事を勤める地。そして我々はその知事より警備をおおせつかつている。いわば、公務員。

警部

夜番たち  
貴様のような流れ者とは地位が違うのだ。わかったか。

警部

夜番たち  
わかったか。

俳優 1  
はい。

警部  
それで、どこから来た。

俳優 1  
ええー。本当のこと言いますよ。

俳優 1

望むところだ。

警部  
俳優 1  
日本の、東京の、練馬区の、江古田。

……

大江戸線と、西武池袋線が通つて。ああ、ええと、大江戸線  
ていうのは地下鉄で、つていうより、いまいつですか？

○月の○日だ。

何年の？

俳優 2  
俳優 1  
夜番 2  
夜番 3  
俳優 1

1600年。

……蒸気機関車というものが、いずれ発明されて。実用化されたのは十九世紀の初めだったかな。大量の物資と人を運べるようになった。で、そこから紆余曲折ありまして、大江戸線つていうのは、

警部  
俳優 1  
何を言っているのかわからんな。死刑。

俳優 1  
えっ。

夜番 3  
俳優 1  
(記録し) 死刑。

俳優 1  
えっ。

警部  
俳優 1  
身元不明の不審者を我々の手で処刑する。伯爵に伝えろ、

俳優 1  
えっ。

夜番 1  
は。

警部  
銃の用意。

俳優 1  
は。

俳優 1  
たんま。たんま、たんま。ちよつと、ちよつと待つてよ、そう

いうんじゃなくてさ。もつとあるじゃん、ねえ。何したの？とか、どつからきたの？とか、あんたのお名前なんてえの？とか。だつてこれ、取り調べでしょ？取つてよ、調べてよ、もつとこ  
う、綿密にさあ。

警部  
話が通じない相手に取るも調べもあるものか。行け。

夜番 1・2  
は。

俳優 1  
ストップ。待つて。落ち着いて。僕の話聞いて。聞いて。僕は  
は真実、本当に、まごうことなく、嘘いつわりなく潔白です。  
あ、そうだ、神。神に誓う。僕は、怪しいことは何にもしてい  
ません。そりゃね、確かに、あなたたちからは、虚空に向かっ  
て呟いているように見えたかも知れないけど、僕は違うつもり  
でお話しました。前説といって、お芝居の始まりのご挨拶  
をしていただけなんです。お客様に向かつての、言わばおしゃ  
べり。本編が始まる前の、イントロダクション。ね？ ほら。  
何の危険もないでしょ？ だつて単なるご挨拶ですよ？  
ふむ。

警部

俳優 1 はい。

警部 わかった。

俳優 1 はい。

警部 無礼者。

俳優 1 はい？

警部 貴様、明日の結婚式で、頼まれてもいないのに勝手にご挨拶をしようとしているな。

夜番たち 何と。

警部 そうやってクロードイオ伯爵と、レオナート殿の一人娘ヒーロ様の婚礼を妨害しようという魂胆。

夜番たち 何と。

警部 何たる無礼もの、神をも恐れぬ冒涇者。そこへ直れ。手討ちにしてくれる。

夜番たち すわ。

俳優 1 やだ、やだやだ、やめて、やめて。

警部 なおれ、貴様、腹をくくれ。

夜番 1 警部、落ち着いてください。それはリンチです。ならん。

夜番 2 あくまでレオナート殿の許可を得ませんと。

夜番 3 さもないと我々が犯罪者になってしまいます。

警部 はなせ。

夜番 1 戻っていいんですか。ならず者の日々に。

夜番 2 レオナート殿が召し抱えてくださっている恩義、忘れたのですか。

夜番 3 公務員はリンチをしてはいけません。

警部 くつ。そうだな、我々は、

警部・夜番たち メシーナ・ジャッカル隊。

警部 そして公務員。お上の許可無しでは動けん。貴様、命拾いしたな。

俳優 1 やめてよう。

警部 しかし、婚礼の妨害とは何たる非道。目的は何だ。

俳優 1 すみません、そもそも、婚礼って何ですか。

警部 婚礼も知らんのか。

俳優 1 じゃなくて、誰と誰の。ええと、さっきおっしゃった、

警部 クロードイオ伯爵と、レオナート殿の一人娘、ヒーロ様のだ。

俳優 1 そのクロードイオ伯爵って、どなた様ですか。

警部 ……

俳優 1 はい？

警部

時は夏、所はイタリア。アラゴンの領主ドン・ペドロ殿の部隊、戦を終えて大勝利のもと凱旋し、逗留するのはこの地メシーナ。そこまでは知っているな？

俳優1

いえ、知りませんが、はい。

警部

その部隊に属すはクロードイオ伯爵。お若いながらも武人としては正に若獅子、誉れ高きお方。この度の戦でもその健闘に対しドン・ペドロより恩賞が与えられた。

俳優1

強いんですね。

警部

さて一方、ヒーロー殿。レオナート知事の一人娘で愛娘。まなこに入れても痛くはないと、瞳の中でそれはそれとは大切に、臉にくるんでまつ毛でなでて、蝶よ花よと育てた娘。そのヒーロー殿を見初めた今一つのまなこ。若きライオンクロードイオ。あつぱれ。

警部

願ってもない見事な縁談、めでたく進む婚姻の運び。これすなわちレオナート殿が引退された暁には、我々の次なるボスはクロードイオ伯となるということ。つまり、明日の結婚式は、我々にとって新たなボスの

夜番たち

天下のお披露目。

警部

しかしながら、それを妨害しようというのが、貴様のそのご挨拶。

夜番1

すわ、許すまじ。

夜番たち

迷惑千万。

警部

さあさあ貴様、いかような腹積もり。

俳優1

だから、どんなつもりありませんってば。

3

俳優1

変なところに来ちゃいました。どうしよう、全然聞いてくれないし。ねえ、わかるでしょ。僕は前説をしてただけなんです。

ここ、この舞台で、みなさんに向かって。あの偉そうな人、警部ですか、彼／彼女は俳優で、小林あや／って言って、僕はふだんあやさん／って呼んでいます。あとの部下は、近藤くん、通称コ

ンミキと、綾田と、齋藤くん、通称まこちん。あんなにいっぱい

稽古して、一緒にご飯も食べたのに、今はもう、何にも聞いてくれません。困ったなあ。いや、でも違う。やっぱり僕は、何も悪いことはしていない。僕はここで、僕の役目を果たして

ただけだ。仕事です。俳優としての、仕事。責められることなんて何一つ。死刑？ううん、冗談じゃない。一生懸命やってるだけで殺されるなんて、そんな理不尽、あったもんじゃない。よし、説得しよう。僕は、清廉潔白です。僕は、清廉潔白です。

4

警部 嘘だな。

俳優 1 えっ。

警部 コバヤシアヤとは何者だ。女か？

俳優 1 聞いてた？

警部・夜番 たち うん。

俳優 1 聞こえてた？

警部・夜番 たち うん。

俳優 1 あの、今のはモノログといって、お客さんとその役だけが共

有する心の中の独り言で、

警部 女がいるのか、貴様。

俳優 1 聞け。

警部 答えろ。女がいるのかと聞いているんだ。

俳優 1 ……本当のことを言いますよ。

警部 望むところだ。

俳優 1 います。妻が一人。

警部 ふむ。おまえは今、その妻と離れてここに居るのか。

俳優 1 ええ、妻には妻の生活がありますから。四六時中一緒ってわけには。

警部 ふうん。妻と離れてまで、ご挨拶をね。

夜番 1 警部、よろしいでしょうか。

警部 よろしい。何だ。

夜番 1 婚礼の妨害ではなく、他の目的があつたのではないのでしょうか。例えば何だ。

夜番 2 恐れながら私めが。例えば、ヒーロー様のいとこ、ベアトリス様が目当てということは、考えられませんかでしょうか。

警部 ベアトリス様。

夜番 2 あの美しいながらも才気が溢れすぎて口数の山をわんさと築くおてんば姫。

夜番 3 恐れながら私めも。結婚式に首尾よく紛れ込みベアトリス様に

警部

お目通りするために、一人屋敷の前にてご挨拶の練習をしていたのではないでしょうか。

ベアトリス様はヒーロー様のいところでありながら親友、そのことはこのメシーナでは知らぬ者はない。あいや、わかった。貴様、ベアトリス様のストーカーだな。

俳優 1

違いますって。

警部

違わない。記録。

夜番 3

は。

警部

昨夜御屋敷前にて捕縛せし者男一名、ヒーロー様の御従妹ベアトリス様の御ストーカーなり。

夜番 3

ストーカーに御は。

警部

一応入れとけ。無くて損より、あつて損だ。礼を欠いたら打ち首だぞ。ありすぎだと失笑される方がまだよからう。

夜番 3

ごもつとも。

俳優 1

このたまに入る江戸文化は何だろう。

警部

ナカジマ。

俳優 1

はい。

警部

ベアトリス様のどこが好ましい？その内容いかんによっては恩赦が出るかも知れんぞ。何せ天下きつてのじゃや馬、乗りこなす殿方を常に大募集中だ。

警部・夜番たち

へっへっへっへっへ。

俳優 1

いや、でも、お会いしたことないですし。顔だつて見たこと、

警部

ない？

夜番 1

嘘だろ。

夜番 2

あんなに美しいんだぞ。

夜番 3

一回くらい覗き見たこと、ないわけない。

警部

本当は夜な夜な覗きに來てるんだらう。

夜番 1

でも、それなら、我々と遭遇してますよ。

警部

あそつか。

夜番 2

違う覗き場があるとか。

警部

えっ。

夜番 3

どこだ、おしえろ。

俳優 1

知らないよ。

夜番 2

我々のお気に入りの覗き場は、

警部

おい。警備スポット。

夜番 2

そうだ。警備スポットは、ほら、お屋敷の裏庭あるだろう。お屋敷に向かって右手に、生垣の薄いところがあつて、そこからだとベアトリス様とヒーロー様がお休みになるお部屋のバルコ



ニーが見えるんだ。

夜番 1 毎晩月明かりの下、お二人で夜風を浴びながら髪をとかす。語りながら、笑いながら。そのお美しさったらもう。

警部 天使がふるさと天国についての噂話をしているかのようだ。

警部・夜番たち (溜息)

夜番 3 片方の天使はこの度めでたく花嫁になる。

警部 もう片方もいずれお幸せになる。しかしそれまでは、我々がお守りしなくては。

夜番 1 変な虫は寄せ付けない。

夜番 2 悪い虫は根絶やしに。

夜番 3 守り抜かん、乙女の純潔。

警部 それが我々、

警部・夜番たち メシーナ・ジャッカル隊。

警部 の、サブテーマだ。

俳優 1 そうですか。

夜番 2 なあ、おしえろよ。おまえのスポット。

夜番 1 こっちも連れてってやるからよ。

警部 こういうのはさ、横のつながり大切だから。

警部・夜番たち へっへっへっへ。

俳優 1 知りません。

夜番 3 秘密主義だな。

警部 何だ？一人秘密保護法か？

夜番 1 独立国家だなあ、おい。

夜番 2 一人国民か、治安良さそうだな。

俳優 1 知りません。その誰ですか、ベアトリス？ そんな人、会ったことないですし。

警部 会えるわけないだろう、貴様のような流れ者ごときが。

夜番 3 我々だって覗き見が関の山だ。

俳優 1 っていうか、ヒーローもだけど、から騒ぎの登場人物ですよ、ベアトリス。ベネディックと最終的にくつつく。

警部・夜番たち (俳優 1 を見る)

俳優 1 ん？

警部 なぜ、ベネディック伯爵の名を？

夜番 1 貴様。部隊の関係者だな。

俳優 1 え？はい、舞台関係者ですけど。

夜番 1 どの部隊だ。

俳優 1 ええ、ええと、七転八倒カンパニーといって、僕明治出身なんですけど、学生劇団の卒業生で旗揚げした団体で、

夜番2 旗揚げだ？

俳優1 えっ。そういう言い方しませんか？

夜番3 貴様、さてはドン・ジョン伯爵の一味だな。

俳優1 誰？

夜番3 ドン・ジョン。知らないとは言わせない。いまここに逗留している部隊の長でありアラゴン州の領主であるドン・ペドロ殿、の弟君。

俳優1 アラゴン州。

夜番1 ヨーロッパがこうあつて。

夜番2 これがイベリア半島で。

夜番3 その北東部。こちらへん。

警部 昨年、ドン・ジョン一味は、兄ドン・ペドロ殿に対するクー

デターを起こした。すなわち、反乱軍を旗揚げした。

クーデターは失敗し、寛大な兄は弟と和解の手打ち。

いまドン・ジョンは兄の部隊の一員として戦に出ている。

しかしおさまらないのはドン・ジョンの反抗心。

いつだって、面白くない、浮かない顔で馬上の暮らし。

この度のクロードイオ伯の婚礼についても、ドン・ジョンにと

っては不機嫌の上塗り。

何等かの妨害工作を画策するのは、あり得ること。

警部 ナカジマ。おまえの女は今どこにいる。

俳優1 えっ。ちよつと、わかりませんけど。連絡とってみないと。

警部 どうやって連絡をとる。手旗か、合図か、伝書鳩か。もしくは

警部 秘密の糸電話か。

俳優1 はい？

警部 屋敷の中に、密偵として放たれているのではあるまいか。

俳優1 ええ？ いや、

警部 貴様のご挨拶と女の密偵。この二つでどこかの誰かを陥れるつ

もりなのではあるまいか。

俳優1 そんなつもりはありませんて。

警部 記録。

夜番3 は。

警部 御屋敷前で捕縛した者、自ら手籠めにした女を使い、何等かの

陰謀を画策せし模様。これよりその内容を明らかにせん。

俳優1 ええー。

警部 急ぎ、レオナート殿へ。

夜番3 は。(行く)

警部 逃さんぞ。

俳優 1

ええー。

5

俳優 1

困った事態になりました。僕はから騒ぎ本編の内容を知っている  
ので、ドン・ジョンという男がいかに悪役に描かれているか、  
知っています。人生を楽しめず、いつも不平ばかり言って、誰  
かを貶めようとばかりしている男です。その一味にされるとな  
ると、このお話の中では、完全にワル扱い。処罰対象。つま  
り、最終的に虐げられてもやむを得ないポジションです。参っ  
たなあ。そこ置かれると困るんだけど。ねえ、伊藤くん、これ  
最後までやんなきやだめ？あ、伊藤っていうのは演出です。照  
明もやってるんで、いまはあのブースにいます。ねえ、伊藤く  
ん。これちよつと、作家が書いた流れと違うよね。伊藤くん。  
(返事なし) 無視かよ。困ったな。ねえ、困るんです。舞台上  
の俳優って、誰にも助けられないんです。お話が無事終わるこ  
とだけが、俳優をもとの日常世界に返してくれるんです。だか  
ら僕はこのお話を終えるしかない。しかないんだけど。

6

警部

楽しいか。

俳優 1

何がです。

警部

その、独り言。

俳優 1

モノローグです。やめてよ、もう。

警部

そろそろ教えてくれないだろうか。

俳優 1

何が。

警部

貴様がたくらんでいることは何か。

俳優 1

だから何もたくらんでません。

夜番 1

カツ丼、食うか。

俳優 1

食べません。どこなんだ、ここ。

夜番 2

天国のおふくろさんが、

俳優 1

まだ存命です。やめてください、勝手に殺すの。

警部

後悔するぞ。

俳優 1  
警部  
しませんよ。清廉潔白なんですから。

仮にだ。貴様の女が屋敷に潜り込んでいるとしよう。そうだな、例えば、ヒーロー様とベアトリス様の一番身近な召使のマーガレットのような立場で。そしてヒーロー様あるいはベアトリス様に近づき、取り入るのが貴様のgebirt目的だとしよう。

俳優 1  
gebirtたつて。

警部  
何等かの催しもの際に客のような顔をしてめぐりこみ、懇意なマーガレットの手引きがあれば、貴様は見事、お二人の前に出てご挨拶をすることが出来る。ほら。

俳優 1  
何です。

警部  
つながった。貴様と女と、ご挨拶。

夜番 1・2  
警部、警部、警部はすごい、警部は天才。

俳優 1  
やってるよ。で、どうすんの、これから。僕、帰りたいんだけど。

警部  
ならん。

俳優 1  
えー。

警部  
そもそも、どこに帰るんだ。

俳優 1  
家ですよ、家。江古田の部屋。

警部  
どうやって帰る。

俳優 1  
どうつて……

夜番 3、戻る。

夜番 3  
戻りました。

警部  
ご苦労。

夜番 3  
一つ、ご報告が。

警部  
何だ。

夜番 3  
ヒーロー様とクロードイオ伯の御婚礼が、破談になりました。

警部・夜番 1・2  
何と。

警部  
どういうことだ。

夜番 3  
ヒーロー様が昨夜、何者かと密通しているところを、クロードイオー伯爵殿とドン・ペドロ殿が目撃。激怒したクロードイオ伯は、誓いの言葉を述べ合わんとするそのときに、ヒーロー様の不義をのしり、破談を申し立てたとのこと。

ヒーロー様は。

夜番 1  
無実を訴えながら、気を失われたらしい。

夜番 3  
ベアトリス様は。

夜番 3  
ヒーロー様に付き添っておられる。泣き腫らして、目は真っ赤

だ。

夜番 1

おかわいそうに。

警部

昨夜と言ったな。

夜番 3

は。

警部

ナカジマ。

俳優 1

はい。

警部

よかったな。罪がとんで入ってきたぞ。

俳優 1

どういうことです。

警部

ヒーロー様と密通していたのは、貴様だな。

俳優 1

……

警部

貴様の女、マーガレットの手引きで。

俳優 1

違います。

警部

ヒーロー様の意思とは関係なく、お部屋に忍び込んでことに及

んだ。違うか。

俳優 1

違います。

警部

ご挨拶もなしにことをすませた卑劣漢の貴様は、またマーガレットの手引きで屋敷を出る。しかしやはりご挨拶をしなかったことが心にしこりを残した。だからご挨拶を、一人虚空に向かつてしなおしていた。いや虚空ではない。貴様の心の中のヒーロー様に向かつてだ。そこを我々が見つけて、捕縛した。どうだ。違うか。

俳優 1

違う。

警部

（かぶせて）違うとは言わせない。なぜなら今は1600年、魔女狩りいまだはなやかなりし、疑わしきは罰せよの時代。人権思想が世に花開くフランス革命は十八世紀後半、もうしばらく先の話。すなわち、いまここで貴様に人権はない。弁護人も呼べない。よって違うとは言えない。そしてレオナート殿の許可を得れば、我々は公の命を持って貴様をここで処刑できる。嫌だ。帰る。

俳優 1

俳優 1、出て行こうとするが、

夜番たちに阻まれ、拘束される。

警部

疑わしきは罰する。よって、死刑。

俳優 1

えっ。

夜番 3

（記録し）死刑。

俳優 1

えっ。

警部

身元不明の不審者を我々の手で処刑する。伯爵に伝えろ。

俳優 1 えっ。

夜番 1 は。

警部 銃の用意。

夜番 2 は。

俳優 1 たんま。たんま、たんま。ちよっと、ちよっと待ってよ、そういうんじゃなくてさ。もつとあるじゃん。

警部 もはや聞くことは何もない。行け。

夜番 1・2 は。(行く)

俳優 1 ストップ。待って。落ち着いて。僕の話聞いて。聞いて。僕は真実、本当に、まごうことなく、嘘いつわりなく潔白です。あ、そうだ、神。神に誓う。僕は、怪しいことは何にもしていません。

警部 記録。

夜番 3 は。

警部 せめて書きとどめてやれ。今際の際の遺言だ。おい、好きなだけ喋っていいぞ、貴様の好きな独り言をな。

俳優 1 ええ、もう。モノローグだってば。やだよう。どうしてこんなことに。僕は本当に、ここにいる人たちに害を及ぼすようなことは何一つしていない。何一つ。いやそれだけじゃない、日常だってそうだ。できるだけ他人を傷つけないよう、同時に自分も傷つけないよう、そりや至らないことだってままあるけど、それなりに配慮して生きてきたつもりだ。それが何だ。死刑？ううん、意味がわからない。こんなの変だ、おかしいよ。わからないまま、僕は死ぬ。死ぬ？え、死ぬの？それ本気？でも抵抗しようにも、丸腰だ。どうしよう、やだ、死にたくない、死にたくないよ。いや違う。何で素直に従う必要があるんだ？いいよ、そんな必要ないよ。だってたった一つの僕の命、たった一度の僕の人生。大切にして、どうしてバチがあたる？よし、もういい。素直な良い子は卒業だ。すみません、帰ります。どこへ。

警部 俳優 1 江古田の、妻が待つ部屋へ。ささやかながら、住みよい我が家だ。

警部 貴様、俳優だろう。

俳優 1 俳優であると同時に、一人の人間だ。この空騒ぎにはつきあえない。

夜番 2 (戻り) 銃です。

警部 ご苦労。おい。

夜番 3 は。

夜番 2・3 (銃を持つ)

警部 構え。

夜番 2・3 (構える)

俳優 1 えええ、ちよっと、勘弁してよ。伊藤くん、伊藤くん。ねえ、

これ、違うよ。違うよね。

警部 レオナート殿の承認報告が届き次第、執行する。

夜番 2・3 は。

警部 何か、言い残したことは。

俳優 1 ないよ。ってか、あやさん、あやさん。あやさんでしょ。やめ

ようよ、こういうの。飲みにいこうよ、ご飯食べにいこうよ。

僕飲めないけど、つきあうよ。ビール一杯がんばるよ。綾田。

まこちん。一緒に稽古したじゃんさ、駅前地下の稽古場で。

神社にお参り行っただじゃん、公演成功祈ってさ。ねえ、ねえ、

ねえったら。

遅いな。

俳優 1 そう、いい飲み屋、見つけたんだ、こないだ。やきとんが旨い

の。特にハツ。好きでしょ、あやさん。ビールにハツ。あとカ

シラも旨かったな。何でもお好み串五本、生とセットで八百円。

安くない？ おい、コンミギ。どこだ。どこ行っただ。裏にはけ

て一服してんじゃねえぞ。

ナカジマ。

何だ。

来世で会おう。乾杯は、その時に。

何だよそれえ。

(戻り) 戻りました。

遅かったな。

は。恐れながら、申し上げます。

構え。

お母さん。

その者を処刑するなどのこと。

……何で。

下手人は別にあり。ドン・ジョンの手下、ボラチョーが、別所

にて捕縛され、自らの行いを自白したとのこと。

どういうこと？

警部 ヒーロー様の召使マーガレットを手籠めにし、密通しているよ

うに見せかけ、クローデイオ伯が誤解するように誘導。首謀者

は逃走中のドン・ジョン、目的は婚姻の破談。目下、別部隊に

て厳しく取り調べ中。

警部 ふうん。

夜番 1 よってその者はこの件については無実。よって、特に実害ない

ようであれば、ただちに釈放されたし。よって、無用な処罰は  
行わぬがよしとのこと。

俳優 1 はー。

警部 あ、そう。うーんと。そうね。

夜番 2 (銃を) かたします？

警部 あ、うん、そうね。

夜番 3 (拘束を) はずします？

警部 あ、うん、そうして。

夜番 1 尚、明日、改めて婚礼の儀を行うゆえ、皆さんも是非ご出席さ

れたし。ナカジマ様もよろしければ是非。以上です。

俳優 1 ……

警部 ご結婚、

警部・夜番たち おめでとうございます。

俳優 1 とんだ空騒ぎだ。

おしまい。

〔参考資料〕

原作とあわせ、小田島雄志氏、河合祥一郎氏、松岡和子氏の翻訳を参照しました。